



滯電

2006. 4 No. 27



GSEコモンイースト棟全景

目次

会長ごあいさつ (鈴木 胖)	1	会員の方々のご活躍	23
講演会からの話題	2	教室情報	24
話題	3	卒業者・修了者就職先	26
母校のニュース	5	滯電会役員	28
研究室紹介	8	同窓会だより	30
退官された先生方の近況	15	滯電会だより	31
卒業生の近況	17	クラス委員	37
学生の声	20		

大阪大学工学部電気系同窓会

滯電会

ホームページ : <http://www.osaka-u.info/~reidenkai/>

平成 18 年 4 月

平成18年度大阪大学滯電会総会・懇親会ご案内

滯電会会長 鈴木 胖

拝啓 陽春の候 会員の皆様にはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、平成18年度滯電会総会ならびに懇親会を下記の通り開催いたします。昨年は130名近くの卒業生や先生方が出席され、大盛況でした。母校の先生方を交えて、先輩、後輩、同期生の方々が一堂に会して旧交を温めつつ、情報交換を行う絶好の機会でございます。また、総会・懇親会に合わせて日頃ご無沙汰の同期会を企画されるのもよろしいかと存じます。

昨年同様、本年も講演会を企画いたしました。最新の話題についてご講演いただく予定ですので、皆様お誘い合わせの上、多数ご参加くださいますようご案内申し上げます。

敬具

記

日 時：平成 18 年 6 月 2 日(金) 17:00～21:00

会 場：新阪急ホテル（大阪市北区芝田1-1-35、Phone:06-6372-5101）

次 第：1. 講演会 17:00～18:30 会場「花の間」

「需要家サイドから見たCO₂排出削減」

大阪大学大学院工学研究科電気電子情報工学専攻

教授 辻毅一郎 先生

「新結晶と産業にもたらすもの」

大阪大学大学院工学研究科電気電子情報工学専攻

教授 佐々木孝友 先生

2. 総会 18:30～19:00 会場「花の間」

3. 懇親会 19:00～21:00 会場「紫の間」

会 費：学部卒業平成9年以降の方 7,000円

学部卒業平成8年以前の方 10,000円

会費は当日申し受けます。懇親会のみのご参加も歓迎いたします。

準備の都合上、出欠のご返事を同封のはがきにて、来る5月20日(土)までにお知らせください。

表紙について

表紙の“滯電”は、熊谷信昭大阪大学元総長（通信・昭和28年旧制）の揮毫によるものです。写真は、吹田キャンパス内工学部管理棟の東側に平成16年10月29日に竣工されたGSEコモンイースト棟の全景です。最上階（15階）にはレストランもあり、眺望を楽しむことができます。

会長ごあいさつ

滞電会会長 鈴木 胖
(電気・昭33)



昨年6月に会長に就任してから早くも1年近くが過ぎました。

11月8日(火)に開催された滞電会見学会ではシャープ(株)の世界最先端を行く亀山工場を見学し、一般の見学者ではアクセスできない液晶パネルの製造現場を間近に見ることができました。この隣では次世代のさらに大型の液晶パネルを量産する巨大な工場の建設が進められており世界的な大競争の最前線の緊張感をひしひしと感ずることができました。この見学会では三坂副会長をはじめシャープ(株)の皆様大変お世話になりました。

各支部の総会にも積極的に参加いたしました。10月5日(土)の東海支部では名古屋城の前にある中部電力(株)の巨大な地下変電所、10月22日(土)の九州支部では完成間近い海上の新北九州空港、11月12日(土)の北陸支部では全国でもユニークな富山県水墨博物館、11月19日(土)の中国支部では話題のやまとミュージアムを総会と合わせて見学することができました。各支部の役員の方々が同窓会の絆を深めようと懸命に努力をされている様子に深い感銘を受け、本部も負けないように努力をしなければならぬと感じました。

さて、大阪大学の同窓会には学部レベルから学科レベルまで全部で77もの同窓会がありますが、現在大きな転機にあります。昨年7月25日に、水の都大阪の夏を彩る天神祭の船渡御に大阪大学として初めて参加した「阪大船」の船上で「大阪大学同窓会連合会」の発足式が賑々しく執り行われました。会長には大阪大学工業会会長の熊谷信昭元総長が選任され、副会長には理学部同窓会会長の金森順次郎元総長と(社)医学振興银杏会(医学部同窓会)理事長の松本圭史元医学部長が就任されました。新しく誕生した連合会はその名通り“同窓会の連合体として、各部局等における同窓会はこれまで通りの活動をそのまま続けつつ、さらなる一体感をもってお互いの連携・協力を強め、大阪大学の一層の発展と全同窓生の益々の活躍に資することを目指す”としています。

電気系の同窓会である「滞電会」から見れば、上に工学部同窓会の「大阪大学工業会」があり、さらにその上に「大阪大学同窓会連合会」があるという三重構造になります。同窓会の運営は基本的に会員の会費により賄われていますから、滞電会に属する卒業生から見れば三重の会費を払わなければならないということになります。三重構造の同窓会それぞれの役割を明確にし、差別化をする必要があります。「大阪大学工業会」は「大阪大学同窓会連合会」から見て大学の中で最多の卒業生を抱える工学部・工学研究科全体の窓口という役割を担います。「滞電会」は「大阪大学工業会」ではカバーしきれない固有の活動に的を絞り、予算をスリム化し、会費負担を軽減することが必要だと思います。

滞電会の現在の活動はいずれも必須のものであると考えます。電気系にまつわる出来事や新しい展開、卒業生の近況などを年1回まとめて報告する会報「滞電」の発行、ホームページの管理と更新、他では企画できない見学会の開催、電気系の新卒業生を祝い激励する3月末の「滞電会卒業祝賀会」の開催、東京から九州まで6つある支部への支援は今後も継続すべきです。予算のスリム化のためには見学会費用の受益者負担の徹底、個人情報保護の強化により内容の希薄化が避けられない滞電会名簿の発行の停止などが考えられます。ホームページによる情報提供は費用もあまりかからないのもっと重視すべきです。その一貫として2000年以降の会報「滞電」をホームページ上にアーカイブ化しました。

長期的で最も重要な課題は、会費の納入率を上げることです。卒業生をクラス別、企業別の両面から世話人を決めて組織化し、このチャンネルを通じて各種行事への参加を呼びかける、会費の納入を督促するなどの手だてが有効ではないかと考えています。会員の皆様の主体的で積極的なご協力を切にお願い申し上げます。

講演会からの話題

工学から見た「動物の運動機構と制御」 および医工連携

大阪大学
情報科学研究科
バイオ情報工学専攻 教授
赤澤 堅造
(電気・昭40)



講演会では、①生物と電気、②神経・筋系の力学的な柔らかさ、③やわらかさを実現した筋電義手 Osaka Hand、④医工連携について話題を提供した。①はガルバーニ（解剖学者）とボルタ（物理学者）の話である。ガルバーニは、銅の鉤に吊るしたカエルの足標本に鉄が触れると痙攣することを発表した（1791年、イタリア、Bologna）。彼はこれらの一連の筋収縮の実験から、生物には「動物電気」があるとの説を発表した。一方、ボルタはこの実験結果に着目し、現在の電池の原型ともいえる高い電圧を発生する電池を発明した（1800年）。このままであれば、ハッピーエンドであるが、ボルタは、「筋収縮は異種金属間の接触電位差による」として、ガルバーニの説を否定し、ここに両者の論争が始まった。ガルバーニは、さまざまな実験をして、ボルタに反論する。例えば、金属を使用しないで筋の収縮を実現している。しかしガルバーニはボローニア大学での職を失い、悲惨な状況で亡くなっている。細胞膜が興奮し、筋収縮が発現しているわけであるが、当時の知識・技術では十分には説明は出来なく、興奮・収縮のメカニズムは20世紀になってその詳細が明らかになった。20世紀に入り、真空管、ブラウン管、電極の改良が進み、1943年ヤリイカ巨大神経線維で静止電位が測定され、その後、パッチクランプ法により膜のイオンチャネルを通るイオンの流れが記録された（いずれもノーベル賞）。ガルバーニの没後200年に当たる1997年に、M. Piccolino は、「カエルの実験は有名であるが、ガルバーニの実験は科学史

のなかで間違っただけで説明されている。膜興奮のメカニズムが良くわかってきた今、彼の発見の真実を再考すべき時である」として "Luigi Galvani and animal electricity: two centuries after the foundation of electrophysiology," TINS, vol. 20, No.10, pp.443-448 (1997). の解説を書いている。このTINS (Trends in Neuroscience) の雑誌には想いがある。表紙にガルバーニの顔写真が載っており、今は故人となってしまったが親友の福西宏有君（電子工学科教授）と出席したニューオリンズでの神経科学会議の展示で知り、後日送付してもらったものである。もし彼が健在であれば、この講演会でおそらく optical recording で得た大脳皮質聴覚野での情報処理の話題を提供しただろうと思うと残念でならない。

②、③は筆者が長年取り組んでいる研究テーマである。我々の手足の動きを見ると、運動の滑らかさに眼を奪われるが、実は着地や対象物をハンドリングするときのメカニズムが工学的には魅力がある。脳により筋・運動サーボ系のやわらかさが随意に調節されており、歩行ネコ、ヒトの指を例にとってその仕組みを説明した。さらに、手の制御の仕組みを取り入れた筋電信号によって制御される電動義手について説明した (Okuno R. et al., IEEE Engineering in Medicine and Biology Magazine, July, 2005)。④では、日本の医療機器開発の現状を述べた。医療機器の貿易収支は1990年では輸出=3000億円、輸入=3000億円であったが、2000年では輸出=3000億、輸入=8000億となり欧米に大きく差を付けられている。本分野の研究開発費が日本で特に低いことを述べた (厚生労働省URL <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0331-5.html>)。阪大では、インシリコヒューマン研究会を基盤として、全学横断的な教育・研究の役割を担う組織として臨床医工学融合研究教育センターが開設されたことを述べた。阪大は日本の本分野のリーダであり、益々の発展を願う一人である。

最近の放送と通信についての雑感

日本放送協会
技術局
送信技術センター
部長
松本茂基
(通信・昭50)



放送の歴史は、今から81年前の1925年3月22日東京芝浦の仮放送所から220 W出力でラジオ放送の産声が上がりました。当日の受信数は3,500だったそうです。その後、戦後日本の経済成長とともに、1953年テレビ放送、1969年FM放送、1989年衛星放送（BS）等々がスタートし、民間放送との両輪でもって、オリンピックなどのイベントを節目に確実に視聴者が増えていきました。デジタル化の取り組みも始まり、BSデジタル放送は今や視聴可能世帯数が1千万を超えています。2003年12月からは地上テレビデジタル放送が東名阪でスタートしました。

そして、2006年、本格的なデジタルテレビ新時代に向けた変革の年になります。今年末には地上デジタル放送は全国の都道府県庁所在地で受信できるようになります。全世帯の約80%に達します。BSデジタル放送の特長である「ハイビジョン」「高音質」「データ放送」「双方向」「マルチ編成」が地上放送においても享受できます。また、携帯端末向けの「ワンセグ」サービスが4月から3大都市圏を含む29都府県でスタートします。「ワンセグ」ではモバイル視聴が可能になり、通勤途上の災害時などに威力を発揮することが期待されています。デジタルラジオの東京・大阪での本放送開始も予定されています。さらに、デジタル放送とインターネットを通じて自在に番組視聴のできる「サーバー型放送」サービスが2007年度からの開始が検討されています。

一方、通信においては、政府のIT戦略が「e-Japan」から「u-Japan」へと見直される中、ブロードバンド化が急速に進み、インターネット利用の普及に大きな弾みがつきました。その利用人口は8千万を既に越えており、今やその主役はADSLからFTTHに移りつつあります。また、携帯電話の契約数は9千万を越え、15歳以上の保有率が80%になりました。今後も高速化・高機能化は止まることはないでしょう。

このような状況の中、昨年7月の情報通信審議会の第2次中間答申の中では、「IPマルチキャストによる

地上デジタル波の再送信」について、そして12月の規制改革・民間開放推進会議の答申の中では、「放送の伝送路の多様化」について提起がありました。これは無線有線のデジタル化・ブロードバンド化に伴い、大容量の情報を不特定多数に届ける「放送」と比較的少ない情報を限られた人の間で行う「通信」が、IP技術によるインターネットの普及が介在して、その垣根が急速に低くなってきたこと、このことを「放送と通信の融合」と表現していますが、この垣根が低くなればなるほどそれぞれの本来の役割を改めて見直す必要が出てきたからです。放送の側から見ると、①コンテンツ（番組）の著作権等の権利処理の問題、②「放送のあまねく」に対して情報の格差を生む「デジタル・デバイド」の問題、③非常災害時の情報伝達としての即応性・同報性の問題などの課題があります。一方、通信の側から見ると、①利用価値の高い公共の電波（周波数）の開放、②コンテンツ（番組）の利用制限などの課題があるでしょう。私の持論ですが、放送、通信それぞれの特性・特長を生かした棲み分けにより基本的な役割を果たしつつ、その上で先に述べた諸課題を解決していくことで、本来の融合が生まれるものと考えます。

前述の規制改革・民間開放推進会議の最終報告が3月、通信・放送の在り方に関する懇談会（竹中総務相の私的懇談会）の検討報告が6月、それぞれ予定されており、そういう意味においても今年は放送と通信の大変革の年になる予兆があります。

ところで、先般1月に「NHKの3ヵ年（平成18年度～20年度）経営計画～NHKの新生とデジタル時代の公共性の追及～」が発表されました。一昨年の不祥事による端を発した受信料不払いや対価意識の高まりに対する説明責任とともに、視聴者の受信環境が大きく変わりつつあります。この機に、NHKもこの3ヵ年が正念場と捉え、これまでのNHKの骨格を見直し、デジタル新時代の公共放送としての役割と決意を示したものです。何卒ご理解の程お願いします。

最後に、昭和62年3月の阪大卒業式で熊谷伸昭総長が引用された「立派（*）の精神に沿い「滞国会」先輩・同輩・後輩諸氏が益々活躍されることを祈念して、私の雑文を締めさせていただきます。

(2006年1月末日 記)

(*) 81年まえの1925年（大正14年）3月22日のラジオ放送の産声が上がった日、東京では総裁の後藤新平子爵、犬養毅通信大臣といかにも東京らしく形式の整った形でスタート。一方、大阪でのプログラムは近所の氏神さんの祝詞から始まり米・株式などの相場、午後は芸能番組で最後に北新地の芸者衆の素囃子。いわゆる、形式にも権威にもとらわれず、現実的・革新的な気風で持つて独自のやり方を貫く。これを要するに、それぞれ自らの「派を立てよ」ということであり、それがいわゆる「立派」と呼ばれるもの。

話 題

半導体メーカーから見た車載情報機器の動向

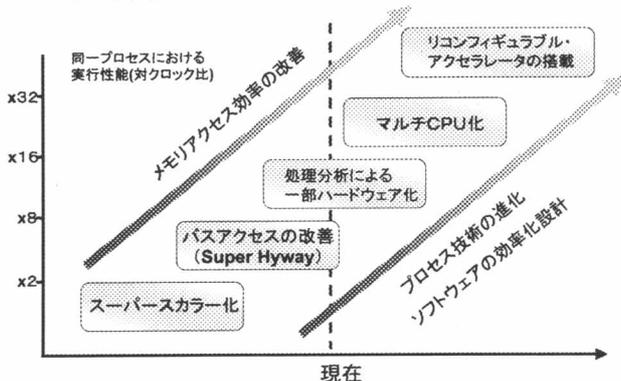
(株)ルネサステクノロジ
システムソリューション統括本部
自動車事業部
副事業部長
山内 直樹
(通信・昭50)



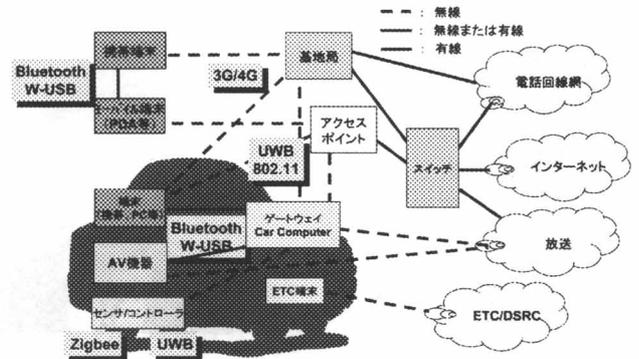
カーオーディオやカーナビゲーションシステムに代表される車載情報機器は、自動車が追求しつづけている「安全・快適・便利」の実現のために、より高性能が進んでいます。

特に、カーナビに代表されるCar Information Systemは、世界各地域ごとに、その進化に特徴があります。日本では、ご存知のとおり正確かつ詳細な地図情報の表示に加えて、本物の建物を実写しているようなリアリティのある三次元風景表示機能が人気です。一方欧米では、万一の盗難や事故のときの通信手段を中心としたテレマティクスと呼ばれるシステムが一般的です。地図は二次元的でも、音声認識などのドライバ用支援が充実しています。そして、今後の大きく発展するといわれる中国では、無線電話とサーバを組み合わせたシステムが有望視されています。なにしろ道路や建物の建設ラッシュで、一元管理しないと難しいのかもしれない。日本製ナビの高度な技術とゴージャスな表示機能は世界をリードしていますが、最近では各地域別の特長を相互に取り入れながら、その機能が進化しています。

車載情報機器のシステム処理の实质性能向上への努力 (低消費電力化とマルチタスク処理性能強化の両立)



自動車のコネクティビティ実用化(今後の有望テーマ)



これらの車載情報機器は、基本的には零下40℃から85℃までの動作保証をした半導体を小型筐体に組み込んで使用します。ですから、SOC (System on a Chip) やマイコンには高性能化と低消費電力化の両方が求められます。そのため、パソコンのように動作クロック周波数を上げることは困難です。そこで、システムの処理内容を分析・理解して、内部バス性能の改善やアクセラレータと呼ばれるハードウェアを付加するなど、地道な磨き上げが実行されてきました。結果として、ユーザに対するセットメーカーのきめ細かい気配りと、消費電力を考慮しながらの実効処理能力の改善に努力する半導体メーカーの努力が、この分野での日本のリードを支えています。

最近、この車載情報機器に新しい動きがあります。それは、「安全走行支援」と「コネクティビティ」実用化への挑戦です。そのためには、画像認識、音声認識、車内外ネットワークとそのシームレス化、広ダイナミックレンジイメージセンサ応用、リコンフィギュラブルデバイスなど、広範な要素技術を活用したデバイスの開発・展開が不可欠です。

特に路車間・車車間通信やネットワーク化は、高速移動通信技術、社会インフラ構築、コンテンツ流通を含めたビジネス協業等、プロジェクト化が世界各地で蠢動しています。これらの協業やプロジェクトを実現するときに、活躍中の先輩・後輩にいろいろお世話になっています。少し残念なのは、この分野での関東・中部・東北地域の大学との連携活動が多いと感じることです。きっと魅力的なテーマの実現にご一緒できると期待しています。

母校のニュース

学科再編について

森田清三学科長

既にご存知のように、平成17年度に大学院の再編を行った。24専攻あった工学研究科の専攻は、平成17年度から統合されて10専攻となり、電気系では、電気工学専攻、通信工学専攻、電子工学専攻、電子情報エネルギー工学専攻の4専攻を統合して、電気電子情報工学専攻となった。他方、原子力工学専攻は環境工学専攻と統合して環境エネルギー工学専攻を設置した。

平成18年度は、平成17年度に実施した大学院の再編に引き続いて、学部の学科の再編を行う。4学科体制だった学部は、平成18年度から大学院の再編に合わせて5学科体制となり、電気系では、電子情報エネルギー工学のエネルギー量子工学科目と地球総合工学の環境工学科目とを統合して、環境エネルギー工学を新たに設置する。その結果、電気系からエネルギー量子工学科目が抜けるため、電子情報エネルギー工学は電子情報工学に改称する。今回は、平成18年度から電子情報工学に変わる学部の組織と教育について

紹介する。

表1は、平成17年度以前と平成18年度以降の学部の履修コース対照表である。平成18年度にできる電子情報工学科には、電気電子工学科目と情報通信工学科目の2学科目体制となる。また、学部の履修コースは、平成17年度までの5コースが平成18年度には4コースに変わる。なお、今回の学部の再編により、従来は大学院のみを担当していた電子情報エネルギー工学専攻に所属していた先生方も学部の授業を担当することになり、大学院の電気電子情報工学専攻に先進電磁エネルギー工学コースを設置したのに合わせて、学部の学科にも先進電磁エネルギー工学コースを新たに設置する。学部の入試定員はエネルギー量子工学科目が抜けるため、197人から162人に減少する。前期日程の定員は129名で後期日程の定員は33名である。

学部のカリキュラムも大幅な改革を行う予定である。具体的にはコア科目制度（必修）を導入する。学科のコア科目、学科目のコア科目、コースのコア科目の導入を平成18年度と平成19年度の2段階で行う予定である。また、全て必修だった専門基礎教育科目に選択科目を導入するとともに、新たに、電磁気や回路の基礎を教える電気物理学A（必修）と波動・熱力学・量子

表1 電子情報工学科の履修コース

平成17年度まで		
	学科目名	履修コース
工 学 科 (定 員 1 9 7 名)	電気工学	電気工学
	通信工学	通信工学
	電子工学	電子工学
	情報システム工学	情報システム工学
	エネルギー量子工学	エネルギー量子工学

平成18年度以降		
	学科目名	履修コース
(定員162名) 電 子 情 報 工 学 科	電気電子工学	システム・制御・電力
		先進電磁エネルギー
		量子電子デバイス
	情報通信工学	情報通信工学

力学の基礎などを教える電気物理学B（必修）を専門基礎教育科目に導入する。新設する電気物理学AとBは電気系の基礎を教えるので、電気系教官が豊中キャンパスに直接出向いて講義を行う予定である。以上に伴い専門科目の大幅な見直しも行っている。

いちよう祭オープン研究室

いちよう祭は大阪大学の創立記念日を祝し、かつ、全学をあげて新入生を歓迎する催しです。平成17年度は4月28日・29日に吹田・豊中の両キャンパスで開催されました。この機を捉えて工学研究科電気電子情報工学専攻（平成16年度までの電子情報エネルギー工学専攻、電気工学専攻、通信工学専攻、電子工学専攻が一体となって平成17年度から新たに発足した大専攻）では、専攻の研究室の研究内容を新入生、高校生および一般の見学者らに広く知ってもらうことを目的として、「電気・電子・情報通信工学の研究の最前線に触れてみよう」というタイトルで専攻の25研究室全てを一般公開しました。公開テーマ一覧は表に示すとおりです。多くの見学者に恵まれ、両日で延べ約400名の見学者がありました。平成18年度も4月30日（日）および5月1日（月）の両日にわたって同様のテーマで

の全研究室の一般公開および新しい試みとして模擬授業が行われます。滞電会会員の皆様におかれましてもゴールデンウィークの一日を利用して久しぶりに母校の研究室を見学していただければ幸いです。なお、旧情報システム工学専攻の研究室がある情報科学研究科におきましてもコンベンションセンター横に新設になりました情報系総合研究棟にて企画展示、研究室開放行事および一日体験教室が行われます。

（伊瀬敏史（電気・昭55）記）

吉野勝美先生退職記念祝賀会

旧電子工学専攻の吉野勝美先生は、平成17年3月31日をもって停年退職されました。先生のご功績を称えるとともに、多年にわたるご指導に対する感謝の気持ちを込めて、先生縁りの310名を超える方々のご列席のもとに、平成17年7月16日（土）、リーガロイヤルホテル「光琳の間」において「吉野勝美先生退職記念祝賀会」が開催されました。

祝賀会は、電気電子情報工学専攻量子電子デバイス部門長の栖原敏明教授の司会で進められました。まず、祝賀会実行委員長である電気電子情報工学専攻長森田清三教授から、吉野先生のご略歴ならびにご功績の紹

平成17年度いちよう祭研究室一般公開テーマ一覧（電気電子情報工学専攻関係分）

電力品質と新しい電力システムを考えよう
AGVの自律分散制御
都市における望ましいエネルギーシステムとはービジュアルコミュニケーションシステムによる分析ー
身近な世界のシステム科学
人工太陽を相対論で作るには
プラズマとイオンビームの世界
様々なビームが創る先端技術の世界を覗いてみよう
中性子がつくる21世紀ー核エネルギーと先端核医療ー
高度情報化社会を支えるネットワーク基盤構築
テラからペタへー進化を続ける光ネットワークー
IP携帯電話の実験ーソフトウェア無線ネットワークと電波エージェントー
デジタル放送時代を支えるマルチメディア技術ー安全で便利なパーソナルメディアの流通に向けてー
コードレスでスマートスペースを実現する無線通信技術
光の極限的な性質とその通信への応用
電波でみる世界の雷
高機能ダイヤモンド電子デバイスの開発
タンパク質結晶の新しい育成方法ー電気工学から生まれたバイオベンチャーー
カーボンナノチューブが拓く次世代テクノロジー
光と磁場で探る半導体ー強磁場中における変調分光測定装置ー
電子が生み出す機能探索ー新材料・新機能デバイスの研究開発ー
プラスチックが拓く未来のエレクトロニクスー有機LEDとレーザーー
光の未来技術を拓く集積量子フォトニックデバイス
超音波による立体視を目指して
極微な力で組み立てるナノの世界ー原子文字を描くー
脳に学んだロボットビジョン

介がありました。引き続き、大阪大学総長 宮原秀夫先生、大阪大学大学院工学研究科長 豊田政男先生、東北大学大学院工学研究科副研究科長 内田龍男先生、シャープ株式会社常任顧問・前副社長 三坂重雄様、長崎総合科学大学常務理事・前学長 山邊時雄先生から、丁寧なご祝辞を賜りました。さらに、今回の祝賀会のためにアメリカとドイツから駆けつけて頂いたテキサス大学教授 Anvar A. Zakhidov先生、ダルムシュタット工科大学教授 Wolfgang Haase先生、ユタ大学教授 Z. Vally Vardeny先生からユーモアを交えたご祝辞を頂きました。その後、シャープ株式会社・元副社長、株式会社国際基盤材料研究所・会長 佐々木正様のご発声で乾杯が行われ、祝宴に入りました。

本祝賀会は着席ピュッフェ形式をとり、テーブルごとに歓談の輪が広がるなか、吉野先生ご夫妻も各テーブルをまわられ、ご夫妻を囲んでなごやかな歓談が続きました。一段落したのち、吉野先生の研究室で元秘書をされていた大阪センチュリー交響楽団ヴァイオリン奏者 広津智香様によって、ファリャ作曲「スペイン舞曲」、フォーレ作曲「夢の後に」、グノー作曲「アヴェ・マリア」の演奏があり、皆素晴らしいヴァイオリンの音に酔いしれました。

祝賀会の終わりに、記念品贈呈、花束贈呈が行われた後、吉野先生よりご挨拶があり、これまでいろいろと支えていただいた方々への感謝の言葉を述べられました。その後、名残惜しい雰囲気の中で、先生ご夫妻は出席者の盛大な拍手に送られて退場され、谷口研二教授による閉会の辞をもって祝賀会は盛会のうちに散会致しました。

(尾崎雅則 (電気・昭58) 記)

赤澤堅造教授 最終講義

情報科学研究科バイオ情報工学専攻赤澤堅造先生は、平成18年3月31日をもって定年退職されることとなりました。ご退職を迎えられるにあたり、最終講義が平成18年2月10日(金)午後3時より電気系メモリアルホールにて行われました。当日は、学内の学生や先生方のみならず、卒業生等学外からも多数聴講に來られました。バイオ情報工学専攻長の柏原敏伸教授より赤澤先生のご略歴が紹介された後、「筋・生体情報工学」と題する1時間半の講義が始まりました。

先生はまず、「生体情報工学」の講義の一部を紹介されました。生体情報工学の講義は、生体医工学(生体工学、医用工学)と人間・福祉工学の情報科学技術

に関する学問分野であり、このため生物に殆どなじみのない工学部の学生に興味をもってもらえるよう、身近な例をあげて説明するよう試みていることを語られ、例えば、手振れ防止カメラを例に取り、人の感覚器と工学センサの比較をしながら、人が受容器でどのように感覚情報を処理しているかなどについて教えていることを紹介されました。

次いで先生は、初期の頃の研究成果の一端をまず紹介されました。生物の優れた機能に学ぶことを研究テーマに選択し、筋はコンパクトで重量当たりの出力が大きいことに着目し、筋についての研究を行うことを決められたと研究テーマ決定の過程を述懐されました。

そして、歩行ネコの下肢筋の力学特性を計測し、神経・筋系の力学的な柔らかさについて、筋の神経支配(運動サーボ)の仕組みの観点から考察し、その結果、筋は立脚相ではかたく姿勢維持に有効で、遊脚相ではやわらかく“柳に風”の特性を持つことなどを明らかにされました。このパイオニア的な研究を通じて、研究を行うには“綿密なる研究計画と詳細な解析・検討が必要”で、学んだことは“叩かなければ何も得られない、外国では叩けば何かが得られる”、と強調されました。この研究成果を基に、生体の運動制御の仕組み(制御システム)を取り入れた人工の手、即ちやわらかさを実現した筋電義手を開発され、切断前の元の手と同じような感覚で義手の制御が可能となり、筋電義手使用の訓練期間が短縮され、壊れやすい物体の把握が容易になることをNHKの教育テレビで放送されたビデオなどを利用して示されました。

次に、ヒューマンインターフェースに関する研究の例として、情報科学技術を福祉工学へ展開できないだろうかというコンセプトのもと、開発中の、神経疾患(リズム不整)の人や中高年の人が容易に音楽演奏の出来る新しい電子楽器 Cymis (Cyber Musical Instrument with Score) の成果の一端を紹介されました。

最後に、夏目漱石の「秋はふみ吾に天下の志」と言う句を引用され、学生諸君そして後輩諸兄がさらなる先進国を目指して研究に望むよう、熱い思いを託され講義を終えられました。

最終講義の後、先生の永年のご指導に感謝の意を込めた花束贈呈が研究室の工藤雅子秘書から行われ、大きな拍手に包まれながら、先生はご退席されました。なお、講義の後、引き続きGSEコモン・イースト棟15階 ラ・シェーナにて赤澤先生を囲んだ茶話会が開かれ、旧知のご友人や卒業生の方々をはじめとして、皆様と和やかな雰囲気でご懇談が行われました。

(朴 炳植 (電気・昭43) 記)

研究室紹介

電気電子情報工学専攻
情報通信工学部門
通信システム工学講座
ワイヤレスシステム工学領域



教授 三瓶 政一

本研究室は、昭和15年にわが国の国立大学に始めて設置された通信工学科の創設以来の伝統を有しており、初代青柳健次教授、昭和43年より滑川敏彦教授、昭和62年より森永規彦教授の指導のもとで、能動回路理論、雑音理論、情報理論、通信理論をベースにした、無線通信技術、光通信技術、システムEMC技術など、通信媒体としての電磁波を意識した、通信システムの物理層/MAC層技術に関する教育と研究を行っており、平成16年より三瓶政一教授に引き継がれ、今日に至っている。その間、研究室の名称も、発足当時の第3講座から、平成元年の情報システム工学科発足に伴って通信方式論講座となり、さらに、平成16年の大学の法人化に伴って、工学研究科電気電子情報工学専攻・情報通信工学部門・通信システム工学講座・ワイヤレスシステム工学領域と呼ばれるに至っている。

現在のスタッフは、三瓶のほか、宮本伸一助教授、増永雅子事務補佐員であり、その他、外国人客員研究員、大学院生、学部生を含めて25名の研究室を構成している。

これまでの通信システムの歴史を見ると、固定電話、光ファイバー通信などの有線通信が、安定性、伝送容量といった観点から無線通信より優位であったため、通信インフラの構築においても、有線通信をベースに進められてきた。また、世の中に携帯電話が普及しても、やはり音質、あるいは伝送容量の観点から有線通信を上回ることができなかったため、家庭ではADSLやケーブルインターネットが普及してきた。しかしながら、携帯電話が第三代に入り、また、無線LANのブロードバンド化が進むにつれて、無線通信と有線通信との能力差は縮小す

る方向にあり、また、無線通信が持つコードレス性と柔軟性は有線通信にはない特徴であることから、現在では、無線通信がユビキタス社会インフラ構築における中核技術として認識されつつある。

当研究室ではこのような状況を鑑み、「不安定で信頼性の低い無線通信」を、「柔軟で信頼性も高い無線通信」へと進化させることを目的として研究を行っている。また、この目的の下での技術開発で生まれた世界に誇れるオリジナル技術の1つが、1990年初頭に世界に先駆けて生み出した「適応変調技術」である。適応変調技術は、すでに無線LAN、第三代携帯電話などに利用されており、無線通信の信頼性の向上、伝送容量の向上、柔軟性の向上を実現するコア技術となりつつある。また、このような動きの中で、無線通信システムの理論限界への挑戦が始まりつつあり、情報理論、通信理論と、信号処理アルゴリズムやシステム構築技術を熟知した技術者の育成に期待が集まっている。

このような背景のもとで、当研究室では、研究の大テーマとして、「ユーザの意識を必要とすることなく、いつでも、どこからでも、情報の収集、情報の発信を可能とするためのユビキタスネットワークの構築を目指し、端末、センサなどをコードレスでネットワークに接続するためのブロードバンドワイヤレス伝送技術、光ワイヤレス伝送技術、ワイヤレスネットワークング技術に関する研究」を設定し、さらに、それを実現するための具体的テーマとして、

- (1) ブロードバンドワイヤレス伝送方式に関する研究
- (2) 光ワイヤレス伝送方式に関する研究
- (3) 周囲の環境に応じて伝送方式、ネットワーク構成を柔軟に制御するコグニティブワイヤレスネットワークングに関する研究
- (4) 電磁干渉対策技術に関する研究

を設定している。

当研究室では、さらに、海外の大学との連携や学生交流の実施、情報通信研究機構や産業界との共同研究の実施など、外部機関との積極的な連携を通じて、研究分野の幅の拡大と内容の一層の充実を図っており、大阪大学が情報通信技術分野で世界の中の1つの拠点となるべく、活動を続けているところである。

また、マルチメディアが世の中に普及している昨今、ユビキタス社会を支える通信インフラ構築技術は、情報機器の中のチップの一部、あるいはネットワークを構成する機器に組み込まれている一部であり、一般の人の目に触れる機会がほとんどなくなりつつある。そのため、その存在は、一般の人にはほとんど意識されない、いわば「空気」のような存在になりつつある。しかしながら、空気がないと人間が生きられないように、通信インフラも、それがなければユビキタス社会は存在し得ない。目に見えやすい部分がもてはやされることは世の常ではあるが、目に見えない部分こそが世界を支えているという「気概」を持ち、世界の最前線で毅然と仕事ができる技術者を育成すべく、研究室を運営したいと考えている。

電気電子情報工学専攻
情報通信工学部門
通信ネットワーク工学講座
ロバストネットワーク工学領域



教授 滝根 哲哉

本研究室は昭和44年に通信工学科が5講座編成になった際に発足した通信工学第五講座（情報工学）にまで遡ることができ、昭和47年から平成4年まで故手塚慶一教授、続いて平成6年から平成12年まで池田博昌教授が担当された後、平成16年6月より滝根が担当している。その間、平成元年には講座の名称が通信網工学講座と改められ、さらに平成8年度の大学院重点化に伴い情報通信システム工学講座通信網工学領域となった後、平成17年度の改組によって標記のような領域名に改められた。現在の領域構成員は、滝根のほか、松田崇弘講師、後藤嘉代子技術専門職員、橋本幸子事務補佐員である。

旧通信工学科・通信工学専攻の流れを汲む情報通信工学部門では、物理層からアプリケーション層まで一貫通貫性を謳って幅広い教育・研究活動を行っている。その中において本研究室は、急速に開発が進む高速高品質伝送媒体の潜在的能力を十分に引き出し、多種多様なネットワークアプリケーションを円滑に通信網へ収容するための柔軟かつ堅牢なネットワークの制御法ならびに設計法の確立に向けて、ネットワーク制御/設計のための基礎理論である通信トラヒック理論、各種トラヒックのモデル化手法ならびに性能評価手法、統合型マルチサービス網における通信品質保証法や輻輳制御法、マルチホップ無線ネットワークにおける通信サービス品質制御法など、中間レイヤーを中心としたネットワーク技術に関する教育と研究を行っている。現在の主な研究テーマは下記の通りである。

1. 通信トラヒック理論に関する研究

通信トラヒック理論の目的は、通信トラヒックの性質と輻輳現象との間の関係を確率モデルを通じて究明し、輻輳現象を定量的に評価することにある。特に、通信トラヒックに典型的に見られる強い相関をもつ情報流のモデル化とその解析手法に関して多くの研究を行っている。

2. 通信トラヒック計測・分析技術に関する研究

様々な目的に応じた効率的な通信トラヒック計測・分析技術ならびに通信網周辺部での計測結果から通信網内部における輻輳状況の推定技術等、確率的・統計的技法を援用した通信トラヒック計測・分析技術の開発を行っている。

3. 各種トラヒックのモデル化手法

通信ネットワークを流れるトラヒックは様々なアプリケーションから生成されたものであり、それぞれ固有の性質をもっている。これらをマルコフ型到着流としてモデル化する手法の研究開発を行っている。

4. 光波長多重網における波長割当並びにトラヒック制御に関する研究

波長多重技術を用いた全光ネットワークでは、伝送速度が格段に速くなる一方、従来と比較して極めて小容量のバッファしか利用できないという特色をもつ。このような条件下で伝送媒体の能力を最大限引き出すための波長割当法、経路選択法、トラヒック制御法等の研究開発を行っている。

5. マルチホップ無線ネットワークに関する研究

アドホックネットワークやセンサーネットワークに代表されるマルチホップ無線ネットワークでは、ランダムアクセス方式固有の性質により、スループットを確保することが困難となっている。そこで、十分な性能の確保に向けて、トラヒック制御法ならびに複数の無線インターフェースを併用した情報転送方式に関する研究を行っている。

電気電子情報工学専攻
量子電子デバイス工学部門
エレクトロニクスデバイス講座
分子機能材料デバイス領域



教授 尾崎 雅則
(電気・昭58・M60・D63)

量子電子デバイス工学部門は、平成17年4月の改組により、電気工学専攻の材料デバイス関係の研究室と電子工学専攻の研究室が主に統合してできたものであるが、中でも本領域は、旧電子工学専攻の量子電子工学講座電子物性工学領域に対応する。ちなみに、電子物性工学領域は、平成8年の大学院重点化までは、電子工学科第一講座（電子工学基礎論講座）と呼ばれ、昭和33年から昭和46年まで菅田栄治教授、昭和59年から昭和61年まで小山次郎教授、昭和63年から平成17年まで吉野勝美教授が担当され、平成17年4月から尾崎が担当している。現在のスタッフは、尾崎と藤井彰彦助教授で、大学院学生15名、学部学生5名とともに研究を行っている。

本領域は、その名のとおり分子材料・デバイスに関する研究を行っている。一般に、エレクトロニクスデバイスは、無機半導体からできている。すなわち、Si、Ga、As、Sbなどの原子を構成要素としている。一方、有機材料は、C、O、H、N、Sなどの元素からなるが、機能の基本単位を分子とし、分子の性質が全体の性質を決定する場合が多い。これまでにエレクトロニクスは、前者の無機半導体を微細加工することによって発展してきたが、分子の多様な電子光機能をエレクトロニクス、オプトエレクトロニクスに利用する研究が、分子エレクトロニクスあるいは有機エレクトロニクスと呼ばれる研究分野であり、既存のトランジスタや発光素子を有機物に置き換える研究と、生体の構成要素でもある分子の潜在的機能を引き出して画期的なデバイスの実現を夢見た研究が進められている。

具体的には、液晶、共役系高分子、電子・光機能性分子を扱った下記のような研究を主に行っている。

1. 液晶の物性と配列・配向制御による機能性電子光材料・デバイスの創成

液晶は、現在ではディスプレイの代名詞ともなりつつある。しかしながら、そのポテンシャルは遥かに高く、まだまだ多くの応用の可能性を秘めている。すなわち、液晶は、数ナノメートルから数百ミクロンに及ぶ様々な自発的秩序構造、階層構造を形成し、特徴的な電氣的・光学的性質を呈する。さらに、分子配向の自由度が高く外場によって容易にその配向が変化するソフトマテリアルである。この自己組織能を積極的に利用してやる、あるいは、ナノスケールの構造制御を行うことにより新しい現象、機能が期待できる。

2. π 共役系分子・高分子の電子光物性と分子エレクトロニクス、フォトニクスデバイスの創成

π 共役系の発達した分子・高分子は、たとえば、高い電子伝導性、強い発光特性、大きな非線形光学特性など高い電子光機能性を有している。これらの特性を生かした、EL素子、太陽電池、トランジスタ、レーザー、光スイッチなどのエレクトロニクスデバイス、フォトニクスデバイスの研究を行っている。

3. 分子・高分子に基づくフォトニック結晶の創成

分子材料は、自己組織的に周期的な分子配列構造を形成することがあり、その特性を生かしたフォトニック結晶の実現を試みている。フォトニック結晶とは、光の波長程度の周期で屈折率の変化する物質をいい、周期的ポテンシャル内を電子波が伝播することにより禁止帯ができるのと同様に、光に対するバンドギャップが発現する。このような物質を、自発的な分子配列を利用して実現できればと考えている。一方、有機分子は、電界、光、温度などにより屈折率などを容易に変化させることができる。この性質を利用して、フォトニック結晶の特性をコントロールして新規デバイスが実現できるものと考えている。

以上のように、分子とエレクトロニクス・フォトニクスをキーワードに研究を行っている。昨今、大学の研究室でも2~3年先の実用化を目指した研究が求められることが増えてきた。もちろん、工学の重要な役割である。しかし、ややもすると企業の研究開発と同じ目線になってしまいがちである。少なくとも10年、20年先をにらんだ夢のある研究とのバランスを大切に、研究を進めていきたいと考えている。

電気電子情報工学専攻
量子電子デバイス工学部門
創製エレクトロニクス材料講座
ナノ材料・計測領域



教授 片山 光浩
(電子・昭60)

本領域は、その源を昭和40年(1965年)に工学部附属研究施設として創設された電子ビーム研究施設の第1部門電子放出体研究部門に遡ることができる。創設時は施設長として電子工学科第1講座の故菅田栄治教授が併任され、電子工学科との緊密な連携のもとに、昭和46年までは裏克己教授、平成元年3月までは塙輝雄教授が同部門を担当された。平成元年5月に同施設の廃止振替により電子工学科イオン工学講座に移行し、平成8年の大学院重点化による量子界面工学領域への改称を経て、平成17年度の工学研究科の改組により標記の領域(研究室)名称を掲げるに至っている。この間、平成3年から平成17年3月まで尾浦憲治郎教授が担当され、平成17年4月より片山光浩が担当している。現在の研究室の人員構成は、教授 片山光浩、学内講師 本多信一、事務補佐員 森下弓子、外国人客員研究員2名、博士後期課程6名をはじめとする大学院・学部学生20名である。

本領域では、次世代ナノエレクトロニクスを支える新機能デバイスの創製に向けて、カーボンナノチューブをはじめとするナノ材料の作製制御とデバイス応用、ならびにそのための極限計測技術の開発と物性評価に関する研究を進めている。シリコントランジスタの微細化の限界を十数年後に控えた現在、数々のroadblockを打破すべく熾烈な開発競争が続いている。これに伴い、原子・分子エレクトロニクス、ナノワイヤエレクトロニクス、量子コンピュータ、非ノイマン型コンピュータなど、シリコントランジスタとは全く異なった原理で機能するデバイスやアーキテクチャが提案されはじめている。このような新機能デバイスの主体素子は、おそらく既存の半導体ではなく、新材料、しかも元からナノ構造化が為されたナノ材料から作られるであろう。同時に、素子間の原子オーダーのばらつき制御に対処できる新しい極限計測技術が重要になると思われる。このような予想を具現できてこそ"真の"ナノテクノロジー・ナノサイエンスであると肝に銘じつつ、現在、以下の研究を重点的に進めている。

(1) 新炭素系材料であるカーボンナノチューブの作製制御技術を基盤として、カーボンナノチューブと金属・半導体・絶縁体とのハイブリッドナノ構造の構築により、新機能デバイスを試作する研究を行なっている。特に、バリスティック伝導デバイス、超高感度センサー、エネルギー貯蔵デバイス、フィールドエミッションディスプレイのための要素技術の開発に関する研究を進めている。

(2) カーボンナノチューブを走査プローブ顕微鏡の探針として用いると、その性能が飛躍的に向上されると期待されている。ナノ構造体の電気伝導測定や生化学分野におけるバイオプローブでは、プローブの導電性制御と電氣的・化学的パッシベーションが不可欠である。これを踏まえて、独自に開発した、カーボンナノチューブに金属膜・絶縁膜・磁性膜・超伝導膜を被膜する技術を用いて、ナノレベルの電子輸送特性や神経細胞間の信号伝達の研究に適した導電性プローブや、磁性や超伝導性などの性質を付与した機能性プローブの開発を進めている。

20世紀初頭の新聞では科学・技術の百年後が予想されており、携帯電話をはじめその殆どが当たっている。これは当時の技術力を念頭に置いたのではなく人々の途方も無い願いを受け止めたからであり、言い換えれば、社会の根底に潜むニーズが大きければ、それが当時点で不可能であったとしても、現実的なアプローチを模索するうちに必ず実現することを示唆しているように思う。多方面で激動化が進む昨今、このような百年先を俯瞰する視点をもって臨みたいと考えている。

**電気電子情報工学専攻
電気電子システム工学部門
先進電磁エネルギー工学講座
高エネルギー粒子工学領域**



教授 児玉 了祐
(電気・昭60・M62・D平2)

本研究室は、昭和54年、大学院独立専攻の1つとして設置された電磁エネルギー工学専攻にその源流がある。平成8年度の大学院改組により電子情報エネルギー工学専攻となり、その中で電磁流体工学講座として開設された。核融合エネルギーや粒子ビームを利用した核反応に関する一線の研究が行われてきた。その後、平成17年度の工学研究科改組に伴い、表記のように改められ児玉が担当教授として就任させていただくことになった。これに伴い、従来型の加速器による粒子ビーム応用に加え、新たにレーザーなどを利用した高エネルギー密度粒子ビームの発生・制御・応用、核変換という新分野の開拓を行うこととなった。現在のスタッフは、児玉のほか、村田勲 助教授、宮丸広幸 学内講師、杉本久司、伊達道淳 技術専門職員、門野照美 事務補佐員であり、大学院生、学部生と共に研究室を構成している。

高いエネルギー密度状態は、高出力レーザーを使用することで比較的容易に実現できるようになってきた。テラヘルツからガンマ線領域の短パルスかつ高強度の電磁波発生や中性子を含めた高エネルギー密度粒子ビームの発生など、従来にない高いエネルギー密度の電磁波・量子ビームが得られるため、関連する研究が、国内外で急速かつ精力的に進められている。このような状況において本研究室でも、高強度レーザーを利用した高いエネルギー密度状態や核過程を含めた極限相転移に関する研究に重点を置くこととなった。このために、プラズマフォトリック

デバイスという高強度光制御や高エネルギー密度粒子ビーム制御のためのプラズマデバイス開発を行っている。世界で唯一のプラズマフォトリックデバイス開発により高い競争力を持って、医療・産業応用はもとより、新しいレーザー核融合や金属水素探査など新エネルギー源や新物質創生に役立つ革新的な電磁波・量子ビーム源の開発と応用研究を行っている。具体的には、以下に示すような学術融合型境界領域の学問体系化と新技術創生を目指している。

【学問的体系化】

・プラズマフォトリクス：

プラズマを利用して高いエネルギー密度の光や荷電粒子ビームを制御するための新概念。レーザー光学、ビーム光学、プラズマ物理学の境界をカバーする応用物理学的な学問体系化。

・極限相転移物理：

結晶化プラズマ、固体-プラズマ中間体、高圧下での金属転移（金属炭素、金属水素）、凝縮状態における核変換などの極限相転移に関する物理学的な体系化を行い、新物質創生に役立てる。

【新技術創生】

・高輝度パルス電磁波源、粒子ビーム源開発と応用

高エネルギー密度パルス電子・イオンビーム源開発と応用

高輝度パルステラヘルツ、X線、ガンマ線源開発と応用

レーザー誘起高エネルギー密度パルス中性子源、素粒子源開発

・プラズマフォトリックデバイス開発

高エネルギー密度荷電粒子ビーム制御プラズマデバイス開発

光を使った複素屈折率制御高密度プラズマデバイス開発

集積型光・量子ビーム制御プラズマフォトリックデバイス開発

・極限相転移による新物質創生

強結合プラズマの生成、金属炭素、金属水素、凝縮状態の核反応物質の探査

また、これら実験研究を進めるために、超高速カメラや高精度中性子スペクトロメーターなどのオリジナルな診断装置開発や先進的なポンプ&プローブシステムの開発も行っている。

以上の研究を推進するために、大阪大学レーザーエネルギー学研究中心との連携はもとより、その他の幅広い国内連携や、米、英、仏、伊、印、中国など国外研究者との連携、最先端高出力レーザー装置、最先端シミュレーションコードを利用した国際共同研究を積極的に行っている。

電気電子情報工学専攻
情報通信工学部門
光電波工学講座
極限光通信工学領域



教授 井上 恭

本領域の源流は、昭和15年の通信工学科創設とともに設置された通信工学第四講座に遡る。菅田栄治教授のもと、電子工学及び特殊通信工学を担当とする講座としてスタートし、電子幾何光学、電子顕微鏡、電子放出現象、超高周波領域における電子現象、などの研究を手掛けた。昭和33年、菅田教授の電子工学科転出に伴い超高周波工学担当講座に変更され、板倉清保教授、熊谷信昭助教授（後に通信工学第一講座担当教授として本講座担当を兼任）のもと、電磁波論、相対論的電磁理論、マイクロ波・ミリ波工学、光伝送、光デバイス、などの研究に取り組んだ。その後、昭和59年より倉蘭貞夫教授、平成9年より塩澤俊之教授、の指導のもとに、電波や光を含む幅広い周波数領域における電磁波の発生、放射、伝送、制御、並びに通信・計測その他への電磁波応用に関する研究を推進した。この間、大学院重点化による改組に伴い、講座名を光電波通信工学講座電磁波工学領域に変更した。平成16年、塩澤教授退官を機に、極限光通信工学領域と名前を改め、光通信に関連する極限技術を研究する領域へと衣替えした。

現在のメンバーは、教授 井上 恭（平成17年着任）、助教授 松本正行、助手 平 雅文の教職員と大学院生9名、学部4年生6名である。

研究内容は、量子光通信と非線形光伝送を2本の柱としている。量子光通信は、量子力学と通信とを融合させた新興の研究分野で、具体的には量子力学的不確定性を利用して究極的に安全な暗号通信の実現する量子暗号・量子秘密共有などを対象とする。現在はまだ立ち上げ段階であるが、量子光通信に関するシステム提案・評価及び実験を進めていく予定である。なお本研究に関して、井上は科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業チーム型研究CRESTの代表研究者を務めている。

非線形光伝送に関しては、従来より、極限的な長距離伝送を可能とするソリトン光伝送の研究に取り組んできており、これをさらに発展させて、光ファイバの非線形性を利用した伝送用光回路・伝送方式、ファイバ非線形を考慮した伝送系設計法、などの研究を推進している。

光通信は情報化社会の基幹インフラとして広く一般に普及してきた。今後、ますます情報の高度化が進み、それに伴い光通信のさらなる高性能化・高機能化が求められるものと考えられる。本領域がその一助となることを願いつつ、日々活動している。

電気電子情報工学専攻
量子電子デバイス工学部門
エレクトロニクスデバイス講座
先進電子デバイス基礎領域



教授 近藤 正彦

本研究室は、先進電子デバイス基礎領域を分掌するもので2005年度の改組で創設された。しかし、沿革は、旧電子工学科が開設された翌年の1959年に設置された電子工学科第3講座に始まる。旧電気工学科第4講座の(故)山口次郎教授と、旧通信工学科第4講座の(故)中井順吉助教授が、配置換で担当した。山口教授は、セレン整流器の研究で著名であるが、技術動向を機敏に読み取り我が国における半導体研究を創始させた。また、当時新設された基礎工学部において電気工学科の開設にも推進した。山口教授が基礎工学部へ移った後、中井助教授は1964年に教授に昇任し本講座を引き継いだ。1967年には(故)犬石嘉雄教授の門下の濱口智尋講師((現)大阪大学名誉教授)が本講座に加入した。(同年、助教授に昇任。)濱口助教授は、中井教授の停年退官後、1985年から本講座を担当した。歴代の研究室は共に半導体に関する研究を遂行し、我が国における半導体産業の発展に貢献した。濱口教授の停年退官後、約4年間教授空席であった。2005年5月より私、近藤正彦が本研究室を担当している。現在、職員として、私の他に、森伸也助教授、森藤正人学内講師、百瀬英毅助手(低温センターと兼任)、久保等技術専門職員が在籍している。

私自身は、基礎工学部電気工学科の浜川圭弘教授((現)大阪大学名誉教授)の研究室の出身で、在学中は西野種夫助教授(現神戸市立工業高等専門学校校長)の指導の下に可視光半導体レーザの研究開発を遂行した。研究を生涯の職業にしたいと考えた修士2年の夏、進路を決めるにあたって「いつの日か大学で研究をするにしても文化の異なる企業での経験は重要ではないか。自分のオリジナルな物を世に出すには企業の方が近道だろう。」と思い民間企業へ就職した。そこでは、1980年代後半に赤色光半導体レーザの商品化に寄与した。私が開発した技術は、DVDレコーダの光源などで今も利用され続けている。赤色光半導体レーザの開発と平行して、自分のオリジナル材料・技術を求めて何年も考え続け、多くの提案を行った。そして、新半導体材料GaInNAs(ゲイナス)の創製に至った。GaInNAsは、従来の半導体と大きく異なる物性を有し学術的にも非常に興味深い材料である。また、次世代IT社会で必須な長波長面発光レーザ等への応用面からも注目されている。GaInNAs等のIII-N-V半導体は、現在、世界中で研究開発され、半導体の一分野までに成長した。

私は着任後、各職員の研究分野、研究室の実験施設・装置、および、研究予算獲得の可能性などを鑑みながら、研究室が一体となれる研究テーマを模索してきた。そして、光結合により光出力する新規半導体レーザの研究開発を主たるテーマとすることにした。光を正確に制御するために、フォトリソグラフィを使用する。既存の半導体レーザは第1世代の端面発光型および第2世代の面発光型の基本構造に大別されるが、両構造ともレーザ光は共振器を構成するミラーを通して出射される。我々が提案する新規半導体レーザでは、レーザ光が共振器と平行に配置された出力用光導波路より出射される。本構造により、次々世代の超大容量光データ通信で必須な波長多重送受信モジュールの高性能化・低コスト化に革新をもたらすことが可能である。本研究開発により次世代IT社会の基盤構築に貢献することが、研究室の目の目標である。我々の提案する新規半導体レーザを半導体レーザの第3の基本構造とし、半導体デバイスに新たな歴史を拓くためには、優れた素子特性をデモンストレーションする必要がある。しかし、現状は、素子設計、結晶成長、デバイスプロセスなど、技術課題が山積している。

皆様方のご協力を得て是非とも目標を達成したいと思いますので、ご指導ご鞭撻の程よろしく申し上げます。

退官された先生方の近況

吉野 勝美（電気・昭39・M41・D47・大阪大学名誉教授）

平成17年3月末をもって大阪大学を定年となり、フリーの身となったが、定年を迎える少し前ごろから、“定年後どうされますか”と随分いろいろな人に尋ねられた。そんな時、いつも同じ返答をしていた。

“毎朝”今まで通りに起きて、JR阪和線に乗って天王寺で環状線に乗り換えて、クルクル周り昼頃になったら天満あたりで弁当を食べるか、食事して、コーヒー飲んで、午後また環状線をクルクル周って、夜になったら帰りますか”

ところが面白いものである、と云うか有り難いものである。平成16年10月の末頃突然かかってきた佐々木正博士の電話で状況が一変した。

地方交付税など税制が変わるので産業の振興がないとじり貧になって地方は大変なことになる。地方切り捨てと云われるように、政府の方針もあって地方は大変なことになろうとしている。こんな中、故郷、島根の産業振興のために一肌脱いでくれ、と云うことである。

小生そんな力があるわけではない、経験不足であると、説明し辞退したが、結果的には佐々木先生のご指名でもあることあって、受けることとなり、頼まれてほぼ決まっていた私学の教授の話を断り、四月以降島根県と大阪の二足の草鞋である。

島根は島根大学客員教授と島根県産業技術センター顧問である。君の故郷だし凄く良いじゃないと云ってくれる人が多いが、本人は責任重大、他府県ならともかく自分の故郷であれば極めて慎重にならざるを得ない。

もう一つというか、二つあって、平成13年から3年間科学技術振興事業団（現在は振興機構）の支援の元でプレベンチャー事業として“液晶による位置制御用精密測長器の開発の研究”を行ってきたが、その成果として会社を設立する義務があり、(株)大阪電子科学技術研究所、(株)大阪光科学技術研究所の二社を立ち上げた。これはメンバーに実務を任せ、会長という立場で大局的に見ていることになっている。これらの研究開発の拠点としては大阪大学先端科学イノベーションセンターのインキュベーション室を借用しており、その関係もあって、大阪大学先端科学イノベーションセンターの特任教授でもある。その一方、長崎総合科学大学の客員教授と云う立場もいただいている。

ともかく、こんなわけで定年とともに皆さんから云われたり、私が答えていたのよりも遙かに多忙な仕事を平行してやると云うことになってしまった。いずれも研究開発がらみで小生の好きな仕事に入るから、本人自身は結構楽しくやっているのが実際である。

早朝から深夜まで働いて暇が無くてこそ吉野君らしいと云われる始末で、仕事を辞めたときはおしまいの時だろうなと云われることもある。これなど、佐々木博士の云われるように寿命限界まで生きて、生き生きと仕事して、パッとこの世とおさらば、まさに理想に近いのかもしれない。

また、近々、島根県を拠点に高齢者向けの認知症の進行を遅らせることも狙ったコンピューターゲームの会社も立ち上げる予定である。

こんなわけで、現役の時代よりむしろ無茶苦茶に走り回っていると云うのが実情で、こんな何も考えず前をむいて走っている間にどうやら年がどんどん進んでいくようである。

それが吉野君らしいと云われそうである。ほめ言葉か批判か分からないが、と云うより小生にあきれたの諦めかもしれない。ともかくもうしばらく回りの方々いろいろご迷惑をおかけすることが続きそうである。

かんがえてみると、阪大での現役時代も研究、論文の余りの多さに、人にあきられるまで暴走車か、暴走列車

のように思われていたようであるが、定年後もその道、レールの上を、それも随分枝分かれした所を暴走中のようである。これがいつ止まるのか、エネルギー切れで止まるのか、故障するか障害物を見つけて急停車するのか、衝突してしまうのか、それとも永久にそのままなのか、本当は自分で判断して決めなければならないのだろうが、どうも自分の性格からすると、誰かがこの暴走車をそのまま引きつついて走らせてくれるかもしれないと勝手に期待して、そのまま放置しそうである。

こんな話をするといかにも仕事一筋で少し夢のなさそうな毎日に見えるかもしれないが、実際には、天候さえ良ければ日本で一番、と云うより世界で一番美しい、優しい自然と人に囲まれて結構幸せであり、それに何と云っても食も、酒も勿論日本一である。

尾浦 憲治郎（電子・昭39・M41・D46・大阪大学名誉教授）

大学入学から数えると40年以上の永い年月に涉って電気系でお世話になりました。この間、良き先輩、同僚、後輩の方々、若く優秀な学生や院生の方々に恵まれ、大変有意義にまた楽しく過ごさせていただきました。教育と研究の両面にわたり充分その職責を果たせたかどうかについては内心じくじたるものがありますが、大過なく無事に過ごせましたことに対して、お世話になった皆様にこの場を借りて厚くお礼を申し上げたいと存じます。

2005年3月末に退官後は、同じキャンパスで電気系建物からもそう遠くない超高圧電子顕微鏡センターに特任教授として勤務しています。この1年間は、退官前から続いている研究プロジェクト関連の仕事、学協会のお世話など学外の用件、などで退官前とあまり変わらず多忙ではありましたが、気分的な開放感は想像していた以上に大きいものがあります。大学の組織から一歩離れたところから眺めています、大学は大改革の真っ只中にあり、工学研究科や電気系でも斬新な取り組みが意欲的に行われており、今後ますます発展することを念願しています。

さて、私が主に関係している学会は応用物理学会ですが、2年ほど前に学振での会議で地球総合工学系のある先生と一緒にあった際に、私が電気電子工学ではなく応用物理学の担当になっているのを見て、その理由を尋ねられたことがありました。私にとってはまったく予期しない質問でしたが、その際、周囲の理解というのは本人が思っているのとは大きく異なる場合があるのを実感しました。そこで、私が関係しています応用物理学会が電気系とも大変深い関わりをもつ学会の一つであることを、滯電会の会員の皆さまにもぜひご理解いただきたいの思いから、この場を借りて簡単に紹介させていただきます。応用物理学会は会員数2万5000人程度ですが、大雑把に言って、企業所属会員が50%、大学・研究所が40%となっています。企業では大手の各電気メーカーから、それぞれ500人から1000人規模で入会しています。大学では、全国的にみて応用物理学専攻があるのは5大学程度だけですので、多くの会員は電気・電子系専攻で材料・デバイスの研究に従事していますが、最近の分野融合の流れにつれて多様な専門や機関からの会員が増える傾向が強まっています。

これまで、永らく教育研究に携わってきた中で、いろんな方々に有形無形のお世話になって参りました。今後は、大変微力ではありますが、後輩の方々が活動をされるうえで手助けになるような環境整備をすることにより、少しでもこれまでのご恩返しができるかと思ひながら日々過ごしています。最近、記憶力は低下しつつありますが、幸い、身体は今のところ至って元気で、若い方々に負けないよう頑張っています。

最後になりましたが、滯電会ならびに会員の皆様のますますのご発展をお祈りします。

卒業生の近況

池田 豊 (通信・平5・M7)

在学当時、とある先生から「卒業したら、大学にはめったに来なくなる。お前も一緒やろな。」と言われていました。確かに、卒業後2、3年は顔見知りもいるので、飲み会だの何だのと声がかかることもあるでしょうが、その後はやはり疎遠になるものだろうと考えていました。ただ、私は幸運なことに、入社以来昨年までリクルータを務めてきたので、公費？を使って大学にお邪魔することができたため、その先生の予言通りにはなりませんでした。その結果、幸か不幸か、多くの後輩たちと同じ会社に勤めています。リクルータ活動を経て、自分とは違う年代の人たちと接することが出来たのは、新鮮であったとともに、刺激を受ける良い機会となり、進んで志願するぐらい気に入っていた業務でした。もし、エンジニアとして使い物にならないと言われたとしても、リクルータ専任なら雇ってもらえるかと思うぐらい、優秀なリクルータだったのでは？と自惚れています。

しかし、去年からカリフォルニア大学バークレー校へ留学させていただくことになり、その大好きなリクルータも遂に引退しました。阪神の優勝を見逃したことと同じぐらい残念なことでした。ただ、留学後も接する人の多くは学生であり、しかも、アジア・南米・中東など、欧米系以外の学生も多く極めて国際色の強いところで、なかなか楽しく過ごしています。アメリカと日本の大学の異なるところとして、良い意味での教授と学生間の対等関係があります。小さいところでは、目上・目下に関らず、ファーストネームで呼び合うことから始まり、授業も質問・議論が起こることが多く、授業を通してディスカッションしている感じです。教授は学生を研究パートナーとして扱っており、ある程度の給料を学生に支払うことで、自身の研究のサポートをさせています。私は、まだまだ教授の研究サポートが出来るところまでは至りませんが。

話は変わりますが、私と同じように企業派遣や大学から来られている日本の研究者の方などとも知り合うことが出来、これまた良い刺激を受けています。彼らの中には、私のように帰国後は元の職場に復帰する人もいれば、Postdocとしてこちらに来ており、こちらでの研究成果が帰国後の就職の鍵になるような、背水の陣を引いた人などもおり、バックグラウンドはさまざまです。

異なる環境や考え方をもつ人たちとの出会いで得た経験を糧に、これからも自分を磨いていきたいと思っています。帰国後、再びリクルータに任命されることも若干期待しつつ。 (シャープ(株))

大塚 秀樹 (電子・平7・M9)

この原稿の執筆依頼が来た後に卒業してから今までを振り返ってみると、平成9年にトヨタ自動車(株)に入社してから約9年が経ち、改めて月日の流れが大変早く感じます。

入社してからの約7年間はドライブトレイン技術部に配属され、主にクラウン・レクサスGS・ISに搭載されているオートマチックトランスミッション(以下A/T)の開発を担当してきました。学生時代にはMOSFETの研究をしており、機械だけでなくA/Tに使われている制御についても入社当初は全く分からないことばかりで勉強の毎日でしたが、その甲斐もあって、現在、自分が開発に携わった車が全世界で走っており、初めて担当した車が走っているところを見たときは大変感慨深く、今でもその光景が目には浮かんできます。その中で、私が開発時に最も気を配ったことは、「品質」、特に購入していただいたお客様が満足して乗っていただくために何をすべきか・どうしたらよいかということを常に念頭におき業務を進めてきました。その結果、北米の顧客満足度調査(JDP社)でレクサスの1位獲得に少しは貢献できたのではないかと思います。

次に2004年からは同部の品質監査室に異動し、トヨタの「品質」について勉強する機会をいただくと共に、これまではA/T開発のみを担当したのでそれ以外のドライブトレイン関係ユニットについてはほとんど無知でしたが、ドライブトレイン全体の品質改善に携わることにより、これら全てのユニットについて勉強することができ、少し視

野が広がったような気がします。

最後に今年1月からはA/T等のユニットの生産工場である衣浦工場に異動し、トヨタ生産方式についての勉強をすると同時に、工場での品質確保のために現在どのようなことをしておりどう改善したらよいかということの日々念頭におき、トヨタの真髄である"品質の良い車"を世の中に出し続けるために一つでも多く貢献ができるようにしたいと思います。
(トヨタ自動車(株) 衣浦工場 品質管理部)

有本 慎司 (情シス・平7・M9)

1997年に住友電工に入社してから約9年が経ちました。振り返ると、本当にあつという間でしたが、病院のシステムを開発するという業務を通じて、色々なことを経験し、学ぶことが出来ました。入社来、私が担当した主なものは、病院システムをインストールする際のインフラ周りの設定補助ツール、医療画像の参照用ビューアソフト、アメリカの病院システムと日本の病院システムとのインターフェース、リハビリテーションシステム、輸血システム、手術システム、看護師さん用の携帯端末システム、医療情報の2次利用システムです。徐々に担当するシステムの規模も大きくなり内容も複雑になってきていますし、最初は、担当範囲分の設計とプログラミングがメインだったのが、今では、全体設計と開発の管理がメインになってきました。今までの担当業務で記憶に残っているのは、特にアメリカの病院システムと日本の病院システムとのインターフェースです。アメリカ出張は、毎日メジャーリーグを見に行ったり、映画を見に行ったり、アメリカで一緒に仕事をしている仲間の家に招待されてディナーをご馳走になったりと楽しい反面、ホテルに戻ってくると朝方まで前日の打ち合わせのまとめと次回打ち合わせ用の資料作成と、今思うと、まあ、元気に仕事していたなあと思います。この仕事を通じて、ドキュメントとは何たるかということを知ると同時に、異文化コミュニケーションの楽しさ／難しさを学びましたし、英語も少しだけ出来るようになりました。(この時には、同時に中国の人とも一緒にものを作っていたのですが、アメリカ人、中国人と日本人の似ているところや似ていないところなども経験出来たためになりました。) リハビリテーションシステムの開発は、私が、初めて設計から導入までを担当したシステムなのですが、病院に向いてお医者さんと話をしながら業務分析をして要件定義を行った結果、良いシステムを作ってくれたとユーザに感謝されたので記憶に残っています。この仕事では、最初の業務分析と要件定義が如何にそのシステムの運命を決定付けるかと言うことを学びました。最近では、コスト管理が厳しくなっていますので、限られた時間、お金でユーザも自分も100%満足出来るようなものを開発することが難しくなっています。しかし、今まで経験してきたことをベースに何にお金と時間をかけて何にかけないべきかを間違えずに見定めて、出来るだけ良いものを開発していきたいと思っている今日このごろです。
(住友電工(株))

大星 文人 (電子・平13・M15)

平成15年にJR西日本に入社して約3年がたちましたが、振り返ると本当にあつという間で充実した3年間でした。多くの同級生がメーカーへ就職する中、JRへの就職を決めたのは"生活に近い場で働きたい"という思いがあったからです。

鉄道会社というと、駅員や車掌、運転士という仕事を想像される方も多いと思いますが、私が担当しているのは、電気関係、主に鉄道信号設備に関する業務です。鉄道の信号設備とは列車を安全に運行させるための重要な設備で、朝のラッシュ時多くの列車が行きかう状況においても列車が脱線したり衝突しないように制御する装置(連動装置といいます)やATS-P設備、身近なものでは踏切保安装置が信号設備にあたり、入社してからの3年間はこれらの設備の保守・設計を担当してきました。

入社してすぐに私は京都府の福知山に配属され、主に京都府北部、兵庫県北部のローカル線を担当していたので

すが、最も印象に残っているのは一昨年の台風による水害です。ニュースで豊岡市や舞鶴市の悲惨な状況を目にされた方も多いと思いますが、鉄道設備においても土砂崩れや浸水により多くの被害が出ました。同僚の中には家に被害を受けた人もいましたが、そんな人も一緒になって設備の復旧に不眠不休で取り組んだことはとても印象深く、とても良い経験になりました。設備が復旧され列車の運転が再開されたときの充実感、復旧作業中に地元の方からかけていただいた暖かい言葉は今でも鮮明に覚えています。

昨年当社は、福知山線の脱線事故という非常に大きな事故を惹き起こしてしまいました。この事故は私にとっても非常にショックなものでした。現在お客様の信頼を回復するため、会社をあげて"安全性向上計画"に取り組んでおり、その中のひとつである、踏切の保安度向上にかかわる設計が、現在の私の主な業務です。入社して約3年となりますが、まだまだ知識においても技術においても未熟であり、日々勉強というのが正直なところです。この3年間の経験から私の仕事が生活の場に密着したものであると感じると同時に、ひとつ間違えば大きな事故に繋がってしまうという責任感を感じながら日々の業務に取り組んでいます。これからも、この責任感を大切に安全な鉄道づくりに取り組んでいきたいと思っております。
(JR西日本(株))

池田 和俊 (電気・平14・M16)

三菱総合研究所へ入社してから、早2年が経ちました。拙稿ながら、この2年間の業務内容および日々の業務の中で感じていることについて報告させていただきます。

私は研究員として、エネルギー分野を中心としたシンクタンク業務に従事しています。シンクタンク業界勤務の卒業生が少ない現状では、「シンクタンクって？」と疑問をお持ちの方も多いためと思われまふ。シンクタンクとは、社会の抱える諸問題に対して科学的な調査を行い、具体的な政策や企業戦略を立案する機関と認識しています。さて、私は現在、マイクログリッドの実証研究や、燃料電池の普及シナリオ分析など、分散型エネルギーシステムの評価に関する調査に主に携わっています。また、新エネルギーを活用した産業育成方策検討や、都市の環境負荷の低減方策検討など、周辺分野の調査にも従事しています。調査手法は、文献調査、アンケート調査、ヒアリング調査、シミュレーション分析、データ計測・分析など多岐に渡ります。若輩ですが、プロジェクトの一部について、調査方針の検討から実作業まで任される機会も多く、充実した日々を過ごしています。

ご参考までに、マイクログリッドの実証研究(「八戸市水の流れを電気です返すプロジェクト」)について紹介します。本研究は、太陽光発電や風力発電など天候依存型電源の出力不安定性が電力系統に与える悪影響を緩和することを目的とした実証研究として、青森県八戸市殿、三菱電機殿と共に、新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO) 殿から受託し、八戸市において実施しています。太陽光発電、風力発電、消化ガスエンジン、二次電池と需要家とを自営電力線で結び、需給変動を制御した上で系統と1点で連系するシステムを構築し、経済性、環境性、電力品質等の評価を進めています。私は、各種計測データの分析、システム評価、関連法規の確認、設備導入検討などを主に担当しています。

シンクタンク研究員には、特定の技術や手法等に捕われず、公正な視点から適切な分析や提案を行うことが求められます。このため、信頼される研究員へと成長するためには、核となる専門分野を深化すると共に、幅広い知識や複眼的な視点を習得することが重要であると痛感しています。また基礎能力として、論理的思考力や情報収集・伝達力の必要性も感じています。これらはシンクタンク研究員だけではなく、多くのビジネスパーソンにとって必要な要素ではないかと思われます。読者の皆さまは、どのようなスキルを重視されているのでしょうか？

最後に、私は在学中に辻教授のご好意により、研究活動以外にインターンシップや海外留学など幅広い経験をさせていただきました。これらの経験は現在の仕事に大きな糧となっています。改めまして感謝の意を表します。

((株)三菱総合研究所 エネルギー研究本部)

学生の声

Mohamed Dakkak (電気工学専攻、D3)

In total, I studied at Osaka University for six years, first as a research student, then as a Master's course student, and finally as a student in Doctor's course. Throughout my studies, I gained a variety of experience, all of which are useful for my life my work and will useful in the future as well. When I pursued my PhD in the department of Electrical Engineering, my supervisor Professor Toshifumi Ise, intensively guided and advised me to solve the problems in my research, and allowed me to have access facilities to conduct research until I finished my Ph.D. The laboratory provides an extensive range of facilities and equipment, the school provides unlimited sources of information along with my supervisor guidance, and university provides an excellent atmosphere for research. Study in Osaka University, offers me a chance to research as well as a lesson on life, and to keep a clear aim in our lives and try our best to achieve our goals. During my study here, I met lots of people, both foreign and Japanese students, and the constant contact with Japanese culture and society and hearing different points of view from different people helped me to better understand this country and its people. I am proud that I am a graduate of Osaka University, an excellent university, and that Osaka University has turned out many world-famous researchers. This pride gives me the motivation to carry through various tasks.

Kieu Phuc Khanh (電気電子情報工学専攻 (情報通信工学コース)、M1)

2000年4月、当時ハノイ工科大学2年生であった私は日本国政府文部省(現 文部科学省)奨学金制度により来日しました。来日して最初の1年間は大阪外国語大学で日本語を勉強しました。そして、2001年4月には学部1年生として大阪大学工学部電子情報エネルギー工学科に入学しました。1年間という期間は、日本語を修得するにはあまりにも短く、学部1年生の頃は本当にたいへんな毎日を過ごしました。特に、主題別科目のような授業では、難解な用語、言い回し、ニュアンスを理解することができず、先生の話をつぱり解りませんでした。しかし、時間の経過とともに、少しずつ講義の内容を理解できるようになりました。それと同時に日本での生活にも慣れ、たくさん日本人および外国人の友達をつくることができました。

今から2年前、学部4年生として研究室配属される時期を迎えました。日本の大学と母国ベトナムの大学との一番大きな違いは、研究室の存在であると思います。研究室の選択のとき、いろいろ心配しましたが、希望通り通信方式論領域(現 ワイヤレスシステム工学領域)に配属されました。研究室に入るとすぐに礼儀の大切さを感じました。研究室には、同級生以外にも、先生・先輩・後輩の多数の関係があり、研究室は小さな日本の社会に見えます。研究室における先輩方は、研究においても、また、プライベートにおいても後輩の面倒を見てくれ、時には親身になって相談に乗ってくれます。このような先輩・後輩の関係は本当に良いと思います。私の場合も、研究室に配属されてからすぐに研究室の雰囲気になれることができました。輪講が始まり、大学院入学試験の勉強が始まりました。大学院入学試験が終わったら、すぐに卒業研究に入り、忙しい時期が続きました。卒業研究では、先生方による指導だけではなく、先輩方も熱心に研究内容の相談や原稿のチェックをして頂きました。卒業論文の提出が

近づくと、4年生全員が研究室に泊まったこともありましたが、でも、研究室は研究だけの場ではありませんでした。時間があれば研究室の皆と一緒にサッカーやテニスなどします。熱狂的な阪神タイガースファンの先輩には甲子園球場まで連れていかれます（ベトナムでは野球はそれほど盛んではありませんが、私は阪神タイガースのファンになりました）。夏旅行、スキー旅行、飲み会など楽しい事もいっぱいあります。

日本人は初めて会うと冷たく見えてしまいますが、実際には親切な方が多いと感じています。私にとって一生忘れることのできない思い出があります。1年生の夏休みに母国ベトナムに帰国していたとき、私はパスポートを紛失してしまいました。パスポートそのものについては再発行により入手することは可能ですが、日本政府が発給したビザについては、日本大使館は再発給しようとしてくれませんでした。ビザが無いと日本に再入国することはできません。夏休みが終わるとすぐに学期末試験が始まってしまいます。私は途方に暮れていました。しかし、事情を理解してくれた大阪大学の留学生センターの担当者の方はベトナムの私の自宅にまで電話して、入国管理局までビザの再発行に必要な書類を取りに行き、私の自宅まで郵送して頂きました。その後、再発行されたパスポートとビザを手にもって日本に再入国することができ、無事期末試験を受験することができました。留学生センター担当者の方の親切な行為に私は心から感動しました。

私の大阪大学での生活は、もうしばらくの間続きます。自分の研究活動はもちろんですが、加えて、日本の文化・風習を理解し、日本とベトナム、両国の相互理解および友好交流に貢献できるよう頑張っていきたいと思っています。

山田 尚宏（電子工学専攻・M2）

大学に入学してから6年という年月が経ちました。高校時代には、大学に入学した時点で就職まで決まってしまうようなイメージがありましたが、全くそんなことはありませんでした。思い起こせば、たくさんのターニングポイントと出会いがありました。授業のコース、専攻、研究室、クラブ活動、就職活動など様々な選択があり、その度、目標や考え方が変わっていきました。そして、多くの人と出会うことで、大きく成長することができました。

私の視点を大きく変えたのは、1回生の時に受講した基礎セミナーでした。講義の内容は、大まかに言うと感覚代行の研究紹介です。それまではエネルギー関係に興味を持ち、その分野の勉強をしようと思っていたのですが、この講義に感銘を受けてからは、工学と生体のつながりに興味移っていきました。生体に似た機能を持つ機械を作ることはできないだろうか、体の不自由な人たちの手助けはできないだろうか、そんなことを考えるようになりました。それが、今、私が所属している研究室を志望した理由です。

研究室での生活は、期待していた通りのものでした。ただ授業を受けて帰るだけの生活でなくなったことがとても新鮮で、ああ大学生なんだという実感がわきました。周りには同じ分野の研究に興味を持つ人たちが集まり、共に実験したり、アドバイスしあったり、時には遊んだりも。集団で1つの目標に向かって行動することが好きな私にとって、研究室はとても居心地の良いものでした。研究室のメンバーにも恵まれました。個性が強く、好奇心が強い皆。ゼミでは、私には思いもよらない発想と知識で質問やアドバイスをしてくれるので、どうしたらそんな発想ができるようになるのか、知識が身につくのか、驚きと感心の連続でした。日常生活でもたくさんの知識や考え方を学ぶことができました。考え方の違いから衝突することもあったけれど、今では良き理解者です。

研究に関する知識だけでなく、物の見方、考え方、人との付き合い方など、この6年間で多くのことを学ぶことができました。そして大きく成長できたような気がします。就職は今の研究とは異なる分野に進むことになりましたが、社会人になっても、これらの経験を活かし頑張っていきたいと思っています。大学生活において私に影響を与えてくださった全ての方に感謝します。

片岡 伸元（電子情報エネルギー工学専攻、D3）

振り返ると大阪大学での学生生活は9年間。様々な経験を積み、多くのことを学ばせていただきました。

学部生時は部活動に没頭し、学業の中心は「部活動・体作り」に関するものでありました。これらにより、その後の研究活動や今後社会へ出て行くための基礎となる体力と精神力は十分培うことができましたが、研究活動で必要となる基礎知識の習得が疎かになっていました。学部生時は、これらを学ぶ上で恵まれた環境におかれていたことに気づく術もなく、研究室配属が行われる4回生まで待たなくてはなりませんでした。学業の基礎を形成すべき時期に気づくことができなかつたのは学生としては恥ずべきことであり反省する点でありました。

フォトリックネットワーク工学講座に配属後は、フォトリックネットワークに関する研究を行ってきました。研究活動の中心は他機関との共同研究であり、学生の研究活動としてはなかなか地に足が着かない部分がありました。しかしその反面、外の世界に触れることによって大学には感じることのできない緊張感、経験、知識を得ることができました。また、当研究室ではそれぞれの先生方、学生が有・無線通信、物理層から上位層といった幅広いテーマに関する研究を行っており、それぞれの研究に対して一点からだけでなく多角的に捕らえることにより相乗効果が生まれ良い刺激になりました。これら研究室で得た経験を糧に、向上心・探求心を絶やすことなく自信を持って社会に出て行きたいと考えております。

最後に、多くの良き先生方、諸先輩方、友人達に恵まれたことも大阪大学での私のかけがえのない財産です。

お願い

ご住所・ご勤務先などが変更になられた方は、事務局まで随時ご連絡くださるようお願いいたします。変更のご連絡は同封いたしました総会の出欠届、平成15年11月に発行いたしました「滞電会会員名簿」に綴じ込みの「訂正カード」、またはファックス、電子メールでも結構です。また、滞電会ホームページの「個人情報の変更」からも変更が可能です。

会員の受賞の情報、同窓会の開催記事などがございましたら、併せて事務局までお知らせください。出来る限り、本会誌に掲載させていただきます。

会員の方々の活躍

受賞 (学会賞・学会フェロー称号等)

佐々木孝友 先生 (電気・昭42・M44)
森 勇介 先生 (電気・平元・M3)
吉村政志 先生 (電気・平6・M8・D11)
レーザー学会業績賞 (論文賞)

森永規彦 先生 (通信・M昭40・D43)
電子情報通信学会名誉員

三瓶政一 先生
「情報通信月間」近畿総合通信局長表彰

北山研一 先生 (通信・昭49・M51)
塚本勝俊 先生 (通信・昭57・M59)
電子情報通信学会業績賞

西尾章治郎 先生
原 隆浩 先生 (情報システム・平7・M9)
船井情報科学振興財団 第4回船井情報科学振興賞

三間罔興 先生
田中和夫 先生 (電気・昭49・M51・D58)
北川米喜 先生
兒玉了祐 先生 (電気・昭60・M62・D平2)
乗松孝好 先生 (電気・昭50・M52)
文部科学大臣表彰科学技術賞研究部門

辻毅一郎 先生 (電気・昭41・M43)
佐伯 修 先生 (電気・昭62・M平元)
エネルギー・資源学会 第1回 (平成17年度) 論文賞

溝口理一郎 先生
人工知能学会研究奨励賞
(財)大川情報通信基金 大川出版賞受賞

來村徳信 先生
人工知能学会第19回全国大会 全国大会優秀賞

戸出英樹 先生 (通信・昭63・M平2)
電子情報通信学会通信ソサイエティ 活動功労賞

松田崇弘 先生 (通信・平8・M9・D11)
電子情報通信学会通信ソサイエティ 活動功労賞

森田清三 先生
イノベーション・ジャパン2005—大学見本市
UBSスペシャル・アワード

[ナノテクノロジー・材料部門賞]

下條真司 先生
大阪科学賞

兒玉了祐 先生 (電気・昭60・M62・D平2)
日本放射線影響学会・寺島記念論文賞

西村博明 先生 (電気・昭50・M52)
中井光男 先生 (電気・昭55・M57・D60)
乗松孝好 先生 (電気・昭50・M52)
西原功修 先生
宮永憲明 先生
井澤靖和 先生 (電気・昭39・M41・D45)
プラズマ・核融合学会 第13回論文賞

中塚正大 先生 (電気・昭41・M43・D48)
プラズマ・核融合学会第10回技術進歩賞

佐々木孝友 先生 (電気・昭42・M44)
森 勇介 先生 (電気・平元・M3)
『第21回櫻井健二郎氏記念賞』(財)光産業技術振興協会

兒玉了祐 先生 (電気・昭60・M62・D平2)
日本学術振興会賞

佐々木孝友 先生 (電気・昭42・M44)
森 勇介 先生 (電気・平元・M3)
日経BP技術賞大賞

西村健治 様 (NTTドコモ) (通信・平9・M11)
電子情報通信学会 平成16年度学術奨励賞

就任 (学会の要職等)

森永規彦 先生 (通信・M昭40・D43)
広島国際大学 社会環境科学部長
平成17年4月

尾浦憲治郎 先生 (電子・昭39・M41・D46)
応用物理学会 会長
平成18年3月16日

岸野文郎
日本バーチャルリアリティ学会 会長
平成18年3月16日

教室情報

▼平成18年度電気電子情報工学専攻役割分担

大学院専攻

電気電子情報工学専攻長	河崎善一郎	教授
電気電子システム工学部門長	伊瀬 敏史	教授
情報通信工学部門長	馬場口 登	教授
量子電子デバイス工学部門長	尾崎 雅則	教授
システム・制御・電力工学コース長	谷野 哲三	教授
先進電磁エネルギー工学コース長	兒玉 了祐	教授
情報通信工学コース長	滝根 哲哉	教授
量子電子デバイス工学コース長	尾崎 雅則	教授

学部学科

電子情報工学科長	森田 清三	教授
電気工学科目長	熊谷 貞俊	教授
通信工学科目長	滝根 哲哉	教授
電子工学科目長	片山 光浩	教授
情報システム工学科目長	村上 孝三	教授
システム・制御・電力工学コース長	熊谷 貞俊	教授
先進電磁エネルギー工学コース長	兒玉 了祐	教授
情報通信工学コース長	滝根 哲哉	教授
量子電子デバイス工学コース長	片山 光浩	教授

就職担当

電気系就職担当幹事	熊谷 貞俊	教授
電気電子システム工学部門・電気工学科目	熊谷 貞俊	教授
情報通信工学部門・通信工学科目	滝根 哲哉	教授
量子電子デバイス工学部門・電子工学科目	近藤 正彦	教授

▼電気系人事 (平成17年4月2日～平成18年4月1日)

赤澤 堅造	教授	定年退職	18.3.31	情報科学
西川 雅弘	教授	定年退職	18.3.31	電気電子
元田 浩	教授	定年退職	18.3.31	産業科学研究所
松田 崇弘	講師	昇任	17.5.1	情報通信
丸田 章博	助教授	昇任	17.12.1	情報通信
中前 幸治	教授	昇任	18.1.1	情報科学
藤井 彰彦	助教授	昇任	18.2.1	量子電子
杉原 英治	助教授	昇任	18.3.16	電気電子

宮本 俊幸	助教授	昇任	18.3.16	電気電子
藤村 昌寿	助教授	昇任	18.4.1	量子電子
近藤 正彦	教授	採用	17.5.1	量子電子
東野 武史	助手	採用	18.8.1	情報通信
青木 秀充	助教授	採用	17.8.1	量子電子
柿ヶ野浩明	助手	採用	18.4.1	電気電子
上向井正裕	助手	採用	18.4.1	量子電子
牛尾 知雄	助教授	転入	18.1.1	情報通信 (大阪府立大学より)
坂和 洋一	助教授	転入	18.1.1	レーザー研 (名古屋大学より)
中田 芳樹	助教授	転入	18.1.1	レーザー研 (九州大学より)
毎田 修	助手	転入	18.4.1	量子電子 (産業科学研究所より)
原 晋介	助教授	転出	17.9.30	情報通信 (大阪市立大学 教授)
寺地徳之	学内講師	転出	17.10.31	量子電子 (物質・材料研究機構 若手国際研究拠点 主任研究員)
大西克彦	助手	転出	18.3.31	情報科学 (大阪電気通信大学 助教授)
一階良知	助手	転出	18.3.31	情報科学 ((株)i-SEIFU)
藤田 玄	助手	転出	18.3.31	先端科学 イノベーションセンター (大阪電気通信大学 講師)

* 電気電子=電気電子システム工学部門

情報通信=情報通信工学部門

量子電子=量子電子デバイス工学部門

情報科学=情報科学研究科

センター、研究所等の協力講座の人事異動を含みます。

▼母校の教壇に立つ本会会員 (平成17年度)

- ・電気工学科目「産業社会と工学倫理」
関西電力(株) 常務取締役
岸田 哲二 (電気・昭38)
- ・通信工学科目「情報社会と職業」
シャープ(株) 技術本部 プラットフォーム開発センター 所長
上田 徹 (通信・昭56)
- ・通信工学科目「国内電波法規」

- 総務省 近畿総合通信局 調査官
丸尾 秀男 (電子・昭62・M平元)
- ・情報システム工学科目「ソフトウェア工学」
新日鉄ソリューションズ(株) 産業ソリューション
第一事業部 ERP第一統括グループ グループリーダー
(部長)
森久 博 (情報・D平12)
 - ・電気電子情報工学専攻「特別講義Ⅰ」
JFEスチール(株)西日本製鉄所 主任部員 (副部長)
高橋 暢 (電子・昭55・M57)
 - ・電気電子情報工学専攻「特別講義Ⅰ」
JFEスチール(株)西日本製鉄所 熱延制御室長
村山 薫 (電気・昭60・M62)
 - ・電気電子情報工学専攻「離散事象システム論」
川崎重工業(株)技術開発本部 システム技術開発
センター
システム開発部 第三グループ 参与
長尾 陽一 (電子・昭47・M49)
 - ・電気電子情報工学専攻「特別講義Ⅲ」
(株)NTTドコモ プロダクト部 部長
永田 清人 (通信・昭55・M57)
 - ・電気電子情報工学専攻「特別講義Ⅲ」
関西電力(株)経営改革・IT本部 情報通信技術
グループ チーフマネジャー
橘 俊郎 (通信・昭61・M63)

滞電会役員

平成17年度滞電会本部および支部役員としてご尽力頂いた方々は下記のとおりです。○印は平成17年度、新たに就任された役員です（敬称略）。また、滞電会支部としては、東京、東海、北陸、中国、四国、九州支部が活動を行なっています。役員氏名の他に、本部および各支部の連絡先を付記してありますのでご用の節はお気軽にご連絡下さい。

【本部】

会 長

鈴木 胖（電気・昭33） 兵庫県立大学

副会長

- 三坂 重雄（電子・昭38） シャープ（株）
○白髭 修一（電気・昭46修） 中国電力（株）
池田 博昌（通信・昭34） 東京情報大学
○山本 勝（電子・昭42） 名古屋工業大学
永田 重幸（電気・昭36） 徳島文理大学
田中 祀捷（電気・昭37） 早稲田大学
龍山 智榮（電子・昭47博） 富山大学
○辻 毅一郎（電気・昭41） 阪大工電気電子

幹 事

- 中塚 正大（電気・昭41） 阪大レーザー
朴 炳植（電気・昭43） 阪大情報科学
谷口 研二（電子・昭46） 阪大工量子電子
木 泰治（電子・昭47） 松下電器産業（株）
田中 和浩（電気・昭49） （株）ダイヘン
岡島 雅明（通信・昭49） 三洋電機（株）
○北山 研一（通信・昭49） 阪大工情報通信
横川 正道（電子・昭49） 住友電気工業（株）
山田富美夫（電気・昭51） （株）東芝
鬼頭 淳悟（通信・昭51） シャープ（株）
○松永 豊己（通信・昭51） 日本電気（株）
○小川 雅晴（電気・昭53） 三菱電機（株）
庄中 永（通信・昭54） オムロン（株）
○伊瀬 敏史（電気・昭55） 阪大工電気電子
○中井 光男（電気・昭55） 阪大レーザー
浜田真希男（電気・昭55） 阪神電鉄（株）
長尾 哲（電子・昭55） 三菱電機（株）
○内海 利也（電気・昭58） 西日本旅客鉄道（株）
○黒部 彰夫（電気・昭58） 松下電器産業（株）

- 清水 哲司（電気・昭58） 西日本電信電話（株）
○田辺 達也（電子・昭58） 住友電気工業（株）
○若井 裕久（電子・昭60） シャープ（株）
橘 俊郎（通信・昭61） 関西電力（株）
○藤田 卓志（電子・昭61） （株）富士通研究所
○佐伯 修（電気・昭62） 阪大工電気電子
和田 具記（電気・昭63） 関西電力（株）
松岡 俊匡（電子・平元） 阪大工量子電子
○宮本 伸一（通信・平2） 阪大工情報通信
山田 佳弘（通信・平2） 日立製作所（株）
尾上 孝雄（電子・平3） 阪大情報科学
○八木 弘雅（電気・平4） 三洋電機（株）

連絡先：〒565—0871 吹田市山田丘2—1

大阪大学大学院工学研究科 電気系内

滞電会事務局 安井晴子

TEL 06-6879-7789（ダイヤルイン）

FAX 06-6879-7774

E-mail: reiden@pwr.eng.osaka-u.ac.jp

【東京支部】

支部長

池田 博昌（通信・昭34） 東京情報大学
総会幹事団体 沖電気工業（株）、日本電気（株）
幹事団体代表

沖電気工業（株）

浅井 裕

執行役員

TEL：03-3454-2111

日本電気（株）

山元 正人

コンピュータソフトウェア事業本部 本部長

TEL：042-333-1250

事務局

〒108-8551 港区芝浦4-10-16 5号館
沖電気工業株式会社
情報通信事業グループ ネットワークアプリケーション本部
斉藤 壮一郎
TEL/FAX : 03-3798-7968/03-3798-7041
E-mail : saitou 329@oki.com

〒211-8666 川崎市中原区下沼部1753
日本電気株式会社
インターネットシステム研究所 ネットワークサービスTG
岡ノ上 和広
TEL/FAX : 044-431-7675/044-431-7681
E-mail : okanoue@ct.jp.nec.com

[東海支部]

支部長

○山本 勝 (電子・昭42) 名古屋工業大学
代表幹事・連絡先

〒464-8603 名古屋市千種区不老町
名古屋大学 エコトピア科学研究所
情報・通信科学研究部門 教授
(工学研究科 電子情報システム専攻 兼任)
片山 正昭 (通信・昭56)
TEL 052-789-4430 FAX 052-789-3173
E-mail : katayama@nuce.nagoya-u.ac.jp

[北陸支部]

支部長

龍山 智榮 (電子・昭47博) 富山大学
代表幹事・連絡先

〒933-0235 新湊市海老江諫合1-2
富山商船高等専門学校 情報工学科
木下 健治 (電子・昭49修)
TEL 0766-86-5272 FAX 0857-31-0880
E-mail : kh1@toyama-cmt.ac.jp

[九州支部]

支部長

田中 祀捷 (電気・昭37) 早稲田大学
代表幹事・連絡先
〒808-0196 北九州市若松区ひびきの2-4
九州工業大学大学院生命体工学研究科
金藤 敬一
TEL 093-695-6042
E-mail : kaneto@life.kyutech.ac.jp

[四国支部]

支部長

永田 重幸 (電気・昭36) 徳島文理大学
代表幹事・連絡先
〒761-0113 高松市屋島西町1850-1
西国電力(株) 総合研修所 技術研修グループ
鈴江 隆志 (電気・昭54)
TEL 087-841-1561
E-mail : suzue 09347@yonden.co.jp

[中国支部]

支部長

○白髭 修一 (電気・昭46修) 中国電力(株)
代表幹事・連絡先
〒730-8701 広島市中区小町4-33
中国電力(株) 電源事業本部 原子力建設電気設計担当
坪内 光介 (電子・平8)
TEL 050-5521-0855 FAX 082-523-6065
E-mail : 274044@pnet.energia.co.jp

同窓会だより

電気昭和 26 年卒同窓会

日 時：平成17年11月2日（水）

場 所：大阪大学中之島センター会議室

出席者：西村先生、桜井先生

今村、絹川、栗山、近藤、対尾、
永田、三宅、宮本、山本、岡本

計 12名



昭和26年電気卒の同窓会を11月2日快晴の日に大阪大学中之島センターにおいて開催しました。

西村先生、桜井先生の御出席を頂き、10名の卒業生が集まり中之島センターの施設の見学を行った後晝食懇談に入り、一年ぶりの再会でお互いの近況やら健康、趣味の話がはずんで時のたつのも忘れて楽しい時をすごす事ができました。亡くなられた級友は12名となり、年々出席者が減ってきましたが、来年の再会を約して散会しました。

(山本 記)

電気昭和30年卒業50周年同期会

日 時：平成17年6月2日（木）

場 所：宝塚ホテル

出席者：飯沼、池田、梅本、岡田、周藤、田中、
高木、高見、土井、中川（功）、中川（健）
中西、長田、春木、松井、松下、養父、
味村、村井、山村、山脇

計 23名

卒業50周年記念同期会を6月2日午後4時30分から西村正太郎、桜井良文両先生のご来駕を仰いで宝塚ホテル翡翠の間で開催した。

当日は梅雨初期の小雨になったが、全国各地から21名が出席、西村先生のご挨拶と桜井先生の乾杯のご発声で宴を開いた後は無礼講となり、両先生を囲み昔に戻って話に花を咲かせた。

殆ど全員が第二の人生を謳歌している中で、意外な才能に磨きをかけている仲間もあり、特に研究者タイプだった土井氏が今年の春の院展に日本画の大作「夜明けの奏」で初入選するビッグニュースもあって、宴が終わった後も17人がホテルに泊まり込み、夜遅くまで歓談して旧交を暖めた。

翌日は雨も上がり、ゴルフ組と大阪市内見学組とに分かれたが、ゴルフ組は張り切ってはみたものの、後半はさすがに七十を超える年齢が見え隠れする有様。

後者は池田氏が案内役となり、梅田スカイビル屋上展望台から大阪市内を展望して梅田地区の開発状況に大阪再生の息吹を感じ取った後、昨年オープンした国立国際美術館で「ゴッホ展」を見学、さらに市内の拠点として建設された大阪大学中之島センターを工業会の田村事務局長のお世話で案内していただき、学生時代の記憶からの変わり様に半世紀の長さを実感した。その後、一部は6月3日夜の滞電会総会に出席した。記録によれば卒業生は37名で、卒業50周年ともなるとさすがに身体の衰えは覆い難く、欠席者の殆どが体調の不良が原因だったが、その早期の回復を祈りながら再会を誓い合った。

(松井 記)



滞電会だより

滞電会ホームページのご案内

平成12年度から開始した滞電会ホームページでは、本会の各種活動内容をより積極的に会員の皆様にお伝えするとともに、皆様の利便性の向上を目指して情報公開に励んでおります。平成15年6月よりは大阪大学工業会（会長：熊谷信昭 元総長）のホームページであるTechno-Net Web (<http://www.osaka-u.info/>) のサーバのもと、下記アドレスからアクセス可能となっています。

<http://www.osaka-u.info/~reidenkai/>

主な内容と致しましては、新着情報、会長ご挨拶、滞電会からのお知らせ、会則、滞電会ニュース、母校のニュース、会費納入方法、個人情報の変更、滞電会役員一覧、関連リンク等となっております。昨年度からは滞電会会報の閲覧も可能となっています。現在はNo. 26からNo. 21までのみですが順次、過去に遡って掲載していく予定です。また、各学科の卒業年度別会費納入情報も公開しております。さらに、各支部ホームページへのリンクも作成しております。

今後は、個人情報の保護の観点からセキュリティの向上を図っていくなど、インターネットの急速な普及のもとで、会員の皆様にとってより役立つシステムになるように努めていきたいと考えております。

益々の充実化を図るため皆様のご意見を下記担当幹事まで頂戴できれば幸でございます。

(朴 炳植 pak@ist.osaka-u.ac.jp (電気・昭43) 記)

平成17年度 総会・講演会・懇親会

平成17年6月3日（金）大阪大学中之島センターにて、129名の参加を得て行われた。総会は午後6時15分より尾上孝雄幹事（電子・平3）の進行役のもとで行われた。大西良一会長（通信・昭32）の挨拶の後、平成16年度事業報告が佐々木孝友総務幹事（電気・昭43）から、また平成16年度会計報告が谷口研二会計幹事（電子・昭46）から行われ、それぞれ承認された。

続いて、大西会長より新会長に鈴木胖氏（電気・昭33）を推薦する旨の提案があり、拍手を持ってこれを承認し、鈴木新会長の就任の挨拶が行われた。次に鈴木新会長から新副会長に三坂重雄氏（電子・昭38）、

同じく新副会長に辻毅一郎氏（電気・昭41）の推薦と、新幹事15名の指名が行われ、拍手を持って承認された。

引き続き谷口研二新総務幹事（電子・昭46）から平成17年度事業計画が、また北山研一新会計幹事（通信・昭49）から平成17年度予算が説明され、いずれも承認された。また、会費納入に関して滞電会 会則（細則）の変更が提案・承認され、総会を終了した。

総会に先だって、午後5時30分から平成17年度滞電会講演会が開催された。赤澤堅造教授（電気・昭40）から「工学から見た『動物の運動機構と制御』および医工連携」と題してご講演を頂いた。長い教鞭経験に基づく、興味深い有益な講演であった。

総会の後は別室に移り、懇親会が谷口研二総務幹事の司会のもとで行われた。鈴木会長の挨拶の後、引き続き、北田幹夫氏（電気・昭28新）から祝辞を頂戴した。

各支部から頂戴した祝電の披露の後、大西前会長の音頭で乾杯し、賑やかな歓談のひとつときを持った。最後に三坂重雄副会長（電子・昭38）の発声のもと万歳三唱を行い、盛会裡に散会となった。

(尾上孝雄(電子・平3) 記)

シャープ亀山とホンダ鈴鹿の旅 (H17年11月8日)

「一般の見学ではブラックボックスはお見せしないのですが、せっかくおいでいただいたのですから、短時間でも喜んでいただける様に少しですが見学いただくことにいたしました。」(九井本部長?)

『ひょっとすると、渋滞で遅れたのでブラックボックスが覗けるようになったのかな?』(幹事)

黄砂が飛び少し霞んではいるが良い天気であった。暑すぎもなく、寒すぎもなく、勿論雨など降ってはいなかった。JR線の人身事故による延着にもかかわらず、ほぼ予定通りに新大阪駅を離れ、バスは亀山へと向かった。只一つの難は名阪国道の集中工事が前日(11月7日)より開始され、車線規制が行われていたことだけであった。一向は予定を遥かに遅れ12時50分にシャープ亀山工場に到着した。勿論、携帯電話の恩恵は最大限に利用された。現地では、延着に対応すべく、説明

会場の変更、見学コースの見直しが行われていた。

1時間に短縮された滞在時間のうちに、液晶パネルの製造工程の説明を受け、「ブラックボックス」を覗き見る事ができた。隣接する凸版印刷でパターンニングされた生板ガラスは「ブラックボックス」に入りテレビになって出てくるのだという。0.1mmクラス10のクリーンルームの中を、1.8×1.5m²厚み0.7mmの薄板ガラス10枚程度を積み上げたコンテナが無人カートに運ばれ、プロセス間を移動してゆく。ご自慢の環境保全施設は見られなかったが、最先端の生産現場を目の当たりにした思いであった。

2時間以上の渋滞により、関宿跡の散策はスキップせざるを得なかったが、何とか、30分遅れで、ホンダ鈴鹿に辿りついた。アシモ君の出迎えに、引きつっていた幹事の心も少しは解れ、ホンダでは、ほぼ予定通り、生産ラインの見学を楽しむ事ができた。1台1000万円を超える高級スポーツカーが作られている手作りの生産ラインの横で、普及車が50秒に一台、自動生産されていく。この工場で、年間50万台以上の車が生産されているという。帰路、またしても夥しい数の車に阻まれ大阪にたどり着いたのは午後9時を少し回ってからであった。自動化され、高効率化された最先端工場を梯子し、そのすばらしさに感嘆するとともに、改めて、われわれが生み出しているものが何なのかを考えさせられた見学であった。

最後に、大幅な延着にもかかわらず、「大変でしたね。道路状況はどうしようもないですからね」とにこやかに出迎えいただいたシャープ亀山、ホンダ鈴鹿の皆様、12時間に及ぶバス旅行に文句を言わずお付き合いいただいた会員の皆様に深くお礼申し上げます。

平成17年度電気系卒業祝賀・謝恩会

平成17年度電気系卒業祝賀・謝恩会は平成18年3月24日(金)卒業式当日の午後6時から、千里阪急ホテル・仙寿の間において開催された。卒業生数256名にご来賓、電気系職員、滞電会役員の方々をあわせて323名の出席者を得た。なお今年度は情報システム工学科目および情報科学研究科は不参加であった。

式典の部は北山研一幹事(通信・昭49)の司会で進められ、まず最初に滞電会会長・兵庫県立大学副学長の鈴木胖先生(電気・昭33)から祝詞を戴いた。ついで兵庫県立大学学長・大阪大学元総長・名誉教授の熊谷信昭先生(通信・昭28旧)、(株)富士通研究所常務取締役の森田修三様(電子・昭43)のご両名から来賓の

祝詞を戴いた。最後に電気系教官代表として、情報通信工学部門教授の小牧省三先生(通信・昭45)からご祝辞を戴いた。このあと、各支部からの祝電の披露があり、パーティーに移った。

パーティーの部は松岡俊匡幹事(電子・平元)の司会ですすめられた。まず、滞電会副会長・シャープ(株)常任顧問の三坂重雄様(電子・昭38)のご発声で乾杯し、歓談に移った。宴もたけなわの頃、東京支部長・東京情報大学教授の池田博昌先生(通信・昭34)からの祝辞に引き続き、鈴木会長より楠本賞の田中哲史君(電子工学科目)、工学賞の中新信彦君(電気工学科目)、山本誠君(通信工学科目)、および賞の次点者の小川優理君(電気工学科目)、前川典弘君(通信工学科目)、並川峻君(電子工学科目)への記念品の授与があった。このあと、恒例の福引き、お餅つきが賑やかに行われ、ついで卒業生の代表として通信工学専攻・博士前期課程の梶原亮君から教官および滞電会諸先輩への感謝と将来への決意が述べられた。最後に滞電会副会長・電気電子システム工学部門教授の辻毅一郎先生(電気・昭41)の音頭で万歳三唱し、めでたく、祝賀・謝恩会はお開きとなった。

ご臨席賜り、祝辞を戴きましたご来賓の方々に厚くお礼申し上げます。また、ご多用中にもかかわらず、臨席戴きました電気系職員の方々にお礼申し上げます。滞電会事務局の安井晴子様にはいつもながら献身的に会の準備にあたっていただき、さらには電気系秘書の方々、一部の学生諸君には準備・受付業務などをお手伝い戴きました。これらの方々、心よりお礼申し上げます。今年も快く記念品、福引きの景品を寄贈戴きました(株)日立製作所、三菱電機(株)、(株)東芝、オムロン(株)、関西電力(株)、シャープ(株)、住友電気工業(株)、(株)ダイヘン、西日本旅客鉄道(株)、NTTグループ各社(西日本、オンデマンドTV、ネオメイト、ドコモ、コミュニケーションズ、データ、コムウェア、インターネット)、阪神電気鉄道(株)、富士通(株)、松下電器産業(株)、(株)ルネサステクノロジーの各社様に厚く、お礼申し上げます。

(北山研一(通信・昭49)記)

平成17年滞電会東京支部総会報告

平成17年滞電会東京支部総会が4月22日午後6時よりホテル銀座ラフィナートにて開催されました。ご来賓として、大西良一会長、桜井良文元会長、佐々木孝友総務幹事、事務局の安井晴子様、また、大阪大学工業会東京支部から副会長の長野城昌様にご臨席頂きま

した。基礎工学部からのご参加8名を含め、総勢72名でありました。

今回は、総会幹事会社のアレンジにて、「一人称での情報発信～コンテンツ不足の時代からの脱却～」と題した真咲なおこ様（SHE KNOWS JOURNAL株式会社 代表取締役社長）の講演会を実施いたしました。JAL客室乗務員からビデオジャーナリストへの転身にまつわる様々なエピソードや、テレビ番組の企画・演出・撮影・編集を一人でこなせる秘訣、制作した番組に対する反響への喜びなど、とても興味深い話を披露いただきました。コンパクトな放送用ビデオカメラや、インターネットでの動画配信など、電子技術、情報通信技術の発展が一人の女性の情報発信活動をここまで可能にしているのかと、時代の変化を強く感じるお話でした。



続く懇親会は、参加者全員の記念撮影から始まり、ご逝去された元滝電会会長の中西義郎先生のご冥福を祈り、全員で黙祷をささげました。ついで池田博昌支部長から、卒業生の同窓意識をより強め、会の活動をより活発に行いたいとの挨拶があり、大西良三会長からは滝電会会員の更なる活躍を期待したいとお言葉を頂きました。続いて桜井良文元会長のご発声にて乾杯。和やかな歓談のなか、佐々木孝友先生から近年著しい再編を行った大学院の近況についてご報告いただきました。また、大阪大学工業会副会長の長野城昌氏からご祝辞をいただきました。最後に、本年度幹事会社を代表して管村昇氏（NTT）の万歳三唱をもって総会全予定を盛会裏のうちに無事終了致しました。

尾尻 健（通信・修平8）

杉園幸司（通信・博平14）記

平成17年度北陸支部総会・見学会報告

滝電会北陸支部は、11月12日（土）に富山市で見学会を行うとともに、平成17年度総会（第16回）と懇親会を開催しました。本部より、桜井良文元会長、鈴木胖会長、谷口研二総務幹事をご来賓としてお迎えし、総会は総勢19名の参加となりました。

当日、JR富山駅に集合した後、最初にタクシーで富山駅から10分程度の距離にある呉羽丘陵に向かい、民俗民芸村と水墨美術館を見学しました。見学会には15名の参加がありました。午前中は小雨もあり曇りがちの天候でしたが、午後からは秋晴れとなり見学会に最適の日になりました。民俗民芸村は民族資料の保存と活用を図るために富山市が設置した文化集落です。

民族資料館、考古資料館、300年の伝統を持つ富山売薬の資料を展示した売薬資料館、その他の施設を見学しました。なお、呉羽丘陵の展望台からは富山市街を眺めることができましたが、立山連邦には雲がかかり残念ながら見えませんでした。民俗民芸村から少し離れた位置にある水墨美術館は、自然に囲まれた静かな環境の中で水墨画など日本文化の美を鑑賞することのできる茶室や日本庭園を配した和風の美術館で富山県が設置しました。当日は横山大観、川合玉堂、その他の画家の水墨画を見学しました。

総会は高志会館2階のカルチャーホールで行われました。龍山支部長の挨拶で始まり、鈴木会長にご挨拶いただいた後、平成16年度の事業報告と会計決算報告を行いました。また、平成16年度に発行した北陸支部長から報告がありました。続いて、平成17年度の事業計画および平成17年度予算案が報告され、了承されました。その後、谷口総務幹事より本部の報告をしていただきました。



引き続き、谷口総務幹事の講演「工学研究科の現状

について」がありました。同窓会組織の重要性、大学院専攻の概要などについて説明された後、谷口先生の講座で行われている研究を紹介されました。

その後、高志会館3階の薫風の間で、17名が参加して懇親会が行われました。浅田前北陸支部長の挨拶で始まり、来賓である鈴木会長のご挨拶の後、櫻井元滯電会会長に乾杯の音頭をとっていただきました。

その後、一人ずつ自己紹介と近況報告を行って親交を深め、最後に谷口幹事の一丁締めで散会しました。

(木下健治(電子修士・昭49) 記)

平成17年度東海支部総会・見学会報告

滯電会東海支部では、10月15日(土)、本部から櫻井良文元会長、鈴木 胖会長、会計幹事の北山研一先生をお迎えし、平成17年度滯電会東海支部総会・見学会が開催されました。東海支部からは倉岡 澄様(電気・昭22)はじめ17名が参加し、中部電力(株)の名城変電所設備の見学と、総会および懇親会が行われました。

当日はあいにくの雨となりましたが、名古屋城前の駐車場の地下に建設された、地下40mの巨大な超高压変電所で、PFC絶縁の主要変圧器やGIS設備、洞道などを見て回りました。地上部分がないため、地震時には地上設備よりかえって揺れの心配が少ないという解説、思ったより広々として湿気のない洞道など、名古屋市中心部に電気を供給する重要設備に、参加者一同、意外な感銘を受けられた様でした。

次いで名古屋城前のKKRホテルに会場を移しての総会は、佐治支部長の挨拶で始まり、鈴木会長より万博が好評に終わったばかりの名古屋地方の元気に対して賞賛いただくと共に、若年層の滯電会に対する意識についての激励を受けました。次いで北山先生からご挨拶をいただいた後、江本幹事から平成16年度の事業報告、会計決算報告があり、承認されました。

また、今年度は役員改選があり、山本 勝新支部長(電子・昭42)および幹事団数名の指名があり、承認されました。その後、懇親会に入り、櫻井先生に人間関係を大切にせよとご教授いただき、倉岡様の音頭による乾杯、日本国策としての技術の重要性を主とするお話を頂戴しました。さらに参加者全員によるスピーチの中で、近況や若年層への働きかけ方などについても語っていただき、親交を深め合いました。そして盛会のうちに、山本新支部長の音頭で万歳三唱を行い、来年の再開を誓い合い、お開きとなりました。



最後に、土曜日にも関わらず見学会でご案内頂いた中部電力(株)の黒下課長、村上副長、山崎副長ほかの皆様と、ご多忙の中ご出席いただきました皆様方に感謝いたします。

(江本邦夫(電気・昭58)、高田 亨(電気・昭60) 記)

平成17年度滯電会中国支部総会

滯電会中国支部は、11月19日(土)、本部から鈴木胖会長、総務幹事谷口研二先生をご来賓としてお迎えし、さらに基礎工学部電気工学科の卒業生2名にもご参加いただき、総勢19名の参加者を得て、今年5月に開館したばかりの呉市海事歴史科学館(大和ミュージアム)において見学会を、また、広島市内に戻りまして小町クラブにおいて支部総会を実施しました。

当日は爽快な秋晴れの空のもと、JR広島駅に集合後、バスで呉市の大和ミュージアムに移動し、まずは職員の方のご案内で施設の電気設備を見学しました。施設バックヤードに設置されている、レドックスフロー電池および氷蓄熱装置を利用し電力負荷平準化を実施していることについて説明いただきました。また、施設屋上には太陽光発電用のパネルが美しい呉の街並みを望んで並べられており、施設電力の一部を賄っていることについて説明いただきました。ひき続き、週末で大勢来館されている一般の入館者の方たちに紛れるように大和ミュージアムの展示を見学しました。

見学会終了後、総会会場である小町クラブへ会場を移し、支部総会を開催しました。

総会は岩川支部長の挨拶から始まり、鈴木会長から滯電会、大阪大学同窓会の動向および会長がご活躍されておられる兵庫県立大学の統合にまつわるお話を含めたご挨拶を頂き、総務幹事である谷口先生からは専攻の再編等、母校の近況についてご紹介頂きました。

続いて議事に入り、平成16年度の支部会計報告等について全会一致で承認され、また、今回をもってご退任されることになりました岩川支部長の後任として白髭新支部長を選出し、岩川支部長へ記念品の贈呈を行いました。最後に参加者全員で記念写真撮影を行い、総会は無事に終了しました。



その後、懇親会に移り、鈴木会長の乾杯の音頭により懇親に入り、参加者全員の自己紹介・近況報告を含めあっという間に時間が過ぎ、最後に白髭新支部長の乾杯の音頭で来年度の再会を期して散会となりました。

最後に、見学会でご案内頂いた呉市海事歴史科学館の職員の方、並びに今回の総会・見学会を開催するにあたりご助力いただきました方々に紙面を借りてお礼申し上げます。また、中国支部の会員の皆さまには、ご都合が合いましたら、来年度の支部総会に是非ともご参加下さいますよう、お願い申し上げます。

(坪内 光介 (電子・平8) 記)

平成17年度九州支部総会

滞電会九州支部では毎年10月第4土曜日に総会を執り行い、それと同時に会員の勉学のための見学会と親睦を深めるための懇親会を行っております。今年で回を重ねること14回目となりました。今回は、本部より鈴木胖会長、谷口研二総務幹事にお出で頂き、支部からは田中 祀捷 (気S37)、吉野 美明 (気S51)、三谷 康範 (気S56)、鳥取 秀郎 (子S59)、服部 励治 (気S61)、上田 啓史 (気S61)、吉水 清文 (気S62)、中村 健一 (気S63)、小杉 成史 (気H5)、木野 敏治 (子H5)、山本 拓郎 (気H5)、田口 彰 (気H7)、園田 彰三 (気H7)、渡邊 政幸 (気H13)、が出席しました。今回は新日鐵と九州電力からの若手の方々に多数参加をいただきました。



午後1時に小倉駅に集合し、観光バスを貸しきって先ずは開港前の新北九州空港へと向かいました。空港では案内係の若い女性が出迎えてくれました。あいにく天候は雨交じりと最悪の天候で外ではゆっくりと説明を聞けませんでした。バスの中で開港にまつわる色々な話を聞かせてもらいました。その後は現在NHKの大河ドラマで話題となっている義経の縁の地である下関赤間神社と唐戸市場を見学しました。

また、今年も懇親会・総会は新日鐵様の施設、大谷会館をお借りして執り行い、田中支部長挨拶の後、九州支部の事業と会計報告を承認し、閉会しました。引き続き講演会では鈴木胖会長から滞電会の近況、谷口先生から母校の最近の活動状況についての御話と先生の最近の研究のご紹介をいただきました。

その後、同会館にて懇親会が行われ、会員同士の尽きない会話で盛り上がりました。バスおよび会場の手配ではニッテツ八幡エンジニアリング上田氏にお世話になりました。この場を借りて謝意を表します。

来年度以降も、会員皆様のご参加と協力をお願いいたします。(服部 励治 (電気・昭61) 記)

平成17年度滞電会ゴルフ例会報告

滞電会ゴルフ例会は、平成17年度で100回を越える開催を誇る、滞電会内の親睦を図る伝統的なゴルフコンペで、昨年度も春秋の2回、三田市郊外の武庫ノ台ゴルフコースで開催されました。

コンペは、一般の部とシニアの部(満年齢65才以上)に分けて優勝を競われています。昨年度の結果は、以下のとおりとなりました。

	第 100 回	第 101 回
開催日	H 17.6.19 (日)	H 17.11.23 (火)
参加者数	3 組10名	2 組 6 名
一般の部 優勝	白川 功 (子38)	尾畑義雄 (通55)
	gross 8 0	gross 1 0 8
	H.C. 4	H.C. 1 7
	Net 7 6	Net 9 1
シニアの部 優勝	毛利悦造 (通27)	毛利悦造 (通27)
	gross 1 0 9	gross 1 1 5
	H.C. 1 1	H.C. 8
	Net 9 8	Net 1 0 5

記念すべき第100回は、梅雨時には珍しい好天で、まるでみなさんの願いが通じたかのようなでした。一般の部では白川さんが、シニアの部では毛利さんがそれぞれ優勝されました。第101回は、絶好のゴルフ日和の中、美しい紅葉を眺めながらのコンペとなりました。一般の部では(幹事の)尾畑さんが、シニアの部では毛利さんが前回に引き続き優勝されました。

ゴルフを終えた会食の場では、表彰式の後、両優勝者をはじめ、各賞受賞の皆さんからコメントを頂戴し、ゴルフの話で盛り上がる中、次回は同期の友人を誘い合わせのうえ、出席を誓い合い、三々五々帰途につきました。



なお、歴史ある滯電会ゴルフコンペですが、出席者の減少に伴い、今年度は以下の1回のみの開催とさせていただきます。

第102回 6月18日(日) 9:01スタート

場所は昨年度と同様、武庫ノ台ゴルフコースで開催を予定しており、7組(28名)の枠をご用意しております。お申し込みは、はがきまたは電子メールにお名前、卒業学科、卒業年次、連絡先(郵便番号、住所、

電話番号)をご記入の上、開催1ヶ月前までに滯電会事務局へご連絡下さい。同期の方と一緒に回るなど、ご希望がございましたら、その旨を追記していただければ極力配慮させていただきますので、お問い合わせの上、奮ってご参加いただきますようご案内いたします。ご参考までに、参加費は27,000円、先着28名様までお受けさせていただきます。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

(多田充宏(電気・平元)記)

ご 寄 付

平成17年度には以下の方からご寄付を頂いております。ここに記して厚く御礼申し上げます。

米田 博明 様(電学・昭27) ￥5,000

お詫び

平成17年4月発行の会報「滯電」No.26の「ご寄付」に関して、記載漏れ、記載不備がございました。ここに、お詫びして下記のように訂正させていただきます。

平成16年度には以下の方々からご寄付を頂いております。ここに記して厚く御礼申し上げます。

定年退職教授ご寄付

吉野 勝美 様(電学・昭39) ￥100,000

塩澤 俊之 様(通学・昭39) ￥50,000

一般ご寄付

上西 康晴 様(電学・昭28旧) ￥4,000

水谷 博 様(通学・昭19) ￥4,000

東島 隆治 様(通学・昭28新) ￥4,000

田中 恒久 様(通学・昭23) ￥4,000

升田 公三 様(電学・昭29) ￥4,000

金 鉉佑 様(通学・昭29) ￥4,000

二俣 隆 様(電学・昭54) ￥12,950

クラス委員

(電気工学科・電気工学科目)

大正14年	久野 坪輝
昭和5年	石田 勝蔵
12年	落合 岩男
14年	石崎 長光
15年	東野 俊一
16年	高田 源次
20年	樋口 正樹
22年	山下 義美
23年	山中千代衛
24年	甲佐 史郎
25年	辻 良夫
26年	近藤 道治
27年	木本 保夫
28年旧	藤井 克彦
28年新	辻 三郎
29年	升田 公三
31年	寺崎 泰彦
32年	大川進一郎
33年	鈴木 胖
34年	白藤 純嗣
35年	松浦 虔士
36年	濱口 智尋
37年	黒田 英三
38年	山中 龍彦
39年	吉野 勝美
40年	赤澤 堅造
41年	辻 毅一郎
42年	佐々木孝友
43年	朴 炳植
44年	谷内田正彦
45年	織田 守昭
46年	土師 總一
47年	大森 裕
48年	原 格
49年	田中 和夫
50年	伊藤 利道
51年	木村 紀之
52年	山本 正純
53年	阪部 周二
54年	白神 宏之
55年	伊瀬 敏史
56年	三谷 康範
57年	裏 升吾
58年	尾崎 雅則

59年	江川 泰弘
60年	秋葉 龍郎
61年	服部 励治
62年	佐伯 修
63年	藤井 龍彦
平成元年	森 勇介
2年	仙井 浩史
3年	舟木 剛
4年	岩井 真
5年	藤田 和久
6年	板垣 鉄平
7年	川瀬 博基
8年	斎藤 貴光
9年	中島 弘朋
10年	矢野 雅一
11年	緒方 晋也
12年	山下 勝則
13年	小谷 研太
14年	犬伏 雄一
15年	小島 鉄也

(通信工学科・通信工学科目)

昭和17年	尾崎 弘
18年	藤澤 和男
19年	黒田 一之
20年	滑川 敏彦
21年	来住 徹
23年	伊藤 肇
24年	奥野 喜好
25年	竹内 信雄
26年	長岡 崇雄
28年旧	福井 淳一
28年新	末田 正
29年	由利 宏二
30年	倉橋浩一郎
31年	栗岡 豊
32年	長谷川利治
33年	宮道 繁
34年	樹下 行三
35年	西原 浩
36年	野村 康雄
37年	真田 英彦
38年	中西 暉
39年	塩澤 俊之
40年	藤岡 弘

42年 宮原 秀夫
 43年 玉川 允敏
 44年 池田 雅夫
 45年 中野 秀男
 46年 里村 裕
 47年 森下 克己
 48年 河崎 善一郎
 49年 北山 研一
 50年 樺澤 哲
 51年 鬼頭 淳悟
 52年 井上 健
 53年 中野 幸男
 54年 馬場口 登
 55年 秦 淑彦
 56年 片山 正昭
 57年 榎原 博之
 58年 山本 幹
 59年 平 雅文
 60年 原 晋介
 61年 大川 剛直
 62年 荒木 範行
 63年 戸出 英樹
 平成元年 堀井 康史
 2年 松田 洋一
 3年 畑 真司
 4年 上田 哲也
 5年 安部田 貞行
 6年 村上 智己
 7年 池田 武弘
 8年 加藤 真
 9年 菅原 弘人
 10年 中西 淳平
 11年 門田 行広
 12年 新熊 亮一
 13年 東野 武史
 14年 村越 昭彦
 15年 藤本 正樹

(電子工学科・電子工学科目)

昭和38年 白川 功
 39年 尾浦 憲治郎
 40年 吉岡 信夫
 41年 鷹岡 昭夫
 42年 打田 良平
 43年 春名 正光
 44年 藤原 秀雄
 45年 杉本 哲夫
 46年 谷口 研二
 47年 〆木 泰治

48年 栖原 敏明
 49年 村上 敬一
 50年 山田 伸一
 51年 西川 博昭
 52年 中前 幸治
 53年 岡田 満哉
 54年 藪内 康文
 55年 太田 快人
 56年 出口 弘
 57年 河合 利幸
 58年 森 俊彦
 59年 正田 博司
 60年 綿森 道夫
 61年 森 伸也
 62年 重弘 裕二
 63年 藤村 昌寿
 平成元年 野口 栄治
 2年 赤坐 正樹
 3年 上野 隆範
 4年 三浦 克介
 5年 藤井 彰彦
 6年 上向井 正裕
 7年 上野 弘明
 8年 梶井 博武
 9年 野田 研二
 10年 島田 尚住
 11年 藤澤 猛史
 12年 大竹 隆太郎
 13年 小野 俊明
 14年 三上 真範
 15年 樋渡 伸二

(情報システム工学科・情報システム工学科目)

平成5年 一階 良知
 6年 安部 敬一
 7年 原 隆浩
 8年 池内 智哉
 9年 相坂 一樹
 10年 密山 幸男
 11年 中尾 太郎
 12年 工藤 祐介
 13年 兼田 佳和
 14年 義久 智樹
 15年 庄島 大基

クラス委員の変更等ございましたら、事務局まで随時ご連絡下さるようお願いいたします。

平成17年度 講演会・総会・懇親会



赤澤堅造先生 ご講演
「工学から見た『動物の運動機構と制御』および医工連携」



総会風景



懇親会のひとこま



懇親会中のひとこま
（「国寶大阪全図」を前にして）

見学会



シャープ(株)亀山工場にて

平成17年度 卒業祝賀・謝恩会

平成17年度 大阪大学電気系卒業祝賀・謝



会長 祝辞



祝賀・謝恩会 乾杯



楠本賞、工学賞、工学賞次点 受賞者表彰



景品抽選会



餅つき風景



卒業生代表 梶原亮君 挨拶

滯電会 会則

会 則

第1条 本会は滯電会と称する。

第2条 本会は事務局を大阪大学大学院工学研究科電気系内に置く。

第3条 本会は会員の親睦を図り、学術の発展および科学技術に関する知識の啓発に寄与することを目的とし、そのため適宜必要な事業を行う。

第4条 本会の会員はつぎのとおりとする。

(1) 正会員

イ. 大阪大学工学部、工学研究科および情報科学研究科ならびにその前身である学校の電気系卒業生。

ロ. 大阪大学工学部および工学研究科の電気系教官。

ハ. 大阪大学工学部電気系教官主査のもとで学位を得た者で、本会に入会を希望する者。

ニ. 特に本会に縁故があり、役員会の承認を得た者。

(2) 特別会員

正会員以外で大阪大学工学部電気系の教授、助教授および講師であった者ならびに特にこの会に縁故のある者。

(3) 学生会員

大阪大学工学部、工学研究科および情報科学研究科の電気系学生

(4) 賛助会員

本会の活動を援助する法人または個人

第5条 本会に次の役員、委員を置く。

会長 1名

副会長、幹事、クラス委員

第6条 会長は総会の議を経て選出する。副会長、幹事については会長が指名し、総会で承認を得る。クラス委員については学科別卒業年度別に選出する。

第7条 会長は本会の会務を総括し、本会を代表する。副会長は会長を補佐する。

第8条 会長、副会長、幹事は役員会を組織し、会務を処理する。クラス委員はクラスを代表し、本会に関する重要事項の相談にあずかる。

第9条 役員会の推薦により、本会に顧問を置くことができる。

第10条 役員任期は2年とする。ただし、重任はさまたげない。

第11条 定期総会は年1回開催する。臨時総会は必要に応じて開催する。定期総会では事業報告、会計報告および役員改選その他の議事を行う。

第12条 本会の事業年度、会計年度は毎年6月1日に始まり、翌年5月31日に終る。

第13条 正会員は別に定めた規定により、会費を毎年7月末日までに納入しなければならない。

第14条 本会は必要に応じて支部を置くことができる。

第15条 本会則の変更は総会の議を経て行う。

細 則

・会費は年額4,000円とする。

(平成7年度より実施)

・大学学部卒業時から52年を経過した会員は、会費の納入を要しない。(平成17年度より実施、平成18年度まで減免年限を延長予定)

編集後記

会報滯電No. 27をお届けいたします。

海外での事務所開設などの国際化対応や、大学院・学部の再編など、大学では急速な変革が進行中であり、また、いちよう祭での研究室公開などを通じて新入生や高校生および一般の方々への情報発信にも注力している状況です。このように急速な変革の情報を少しでも同窓生の方々へお伝えできればと思っております。

昨年4月の個人情報保護法施行により個人情報管理に大きな制約が課せられたことにより、発行予定

であった今年の名簿発行も残念ながら見合わせる事になりました。しかし、大阪大学全体の同窓会組織である大阪大学同窓会連合会も発会し、人のネットワークとしての同窓会組織である滯電会が今後も重要な役割を果たすことは間違いなく、会報「滯電」がその一助となれば幸いです。

最後になりましたが、ご多忙中にもかかわらず玉稿を快くご執筆くださいました方々、ならびに記事の情報収集にご協力くださいました方々に厚くお礼申し上げます。 (編集幹事：佐伯修、松岡俊匡)

滯電会会費納入のお願い

滯電会の財政状況は、諸般の事情により非常に厳しい状況にあります。本会の活動は全て会員各位からの会費に依存しております。本会の活動をより活発にするために、何卒、平成18年度会費(4,000円)の早期納入(できれば6月末日までに)にご協力賜りますようお願いする次第であります。卒業年度の新しい会員各位の納入率が低くなっております。卒業して間もない方々も、是非ご協力のほどお願い申し上げます。

なお、会費納入の便宜を図るため、銀行口座からの会費自動振込制度およびコンビニエンスストアでの会費納入システム(平成12年10月から導入)も採用しておりますので、是非ご利用下さい。また、自動振込の銀行口座を変更ご希望の場合は、滯電会事務局までご一報くだされば、折り返し口座変更手続きに必要な預金口座振替依頼書をご送付いたします。

なお、大学学部卒業時から52年を経過した方の会費は免除になっております(平成17年度より実施、平成18年度まで減免年限を延長予定)ので、納入の必要はございません。また、未納の過年度会費はご請求申し上げないことになっております。

会計幹事

滯電会会員名簿発行保留のお知らせ

平成15年11月に「滯電会会員名簿」を発行しましたので平成18年度は3年毎の名簿発行の年となりますが、平成17年4月から「個人情報保護法」の全面施行により、氏名、住所、電話番号等の個人情報の取扱いに厳しい制約が課せられることになりました。これに伴い滯電会では諸般の問題を慎重に検討するため、会員名簿の発行を一時保留することに致しました。

なお、平成18年度以降の名簿発行につきましては、今後検討していきたいと思っております。本件に関しましてご意見があれば滯電会事務局までお寄せください。

何卒、ご理解のほどをお願い申し上げます。

名簿担当幹事

発行 滯電会

〒565-0871 吹田市山田丘2-1
大阪大学大学院工学研究科電気系内
電話：06-6879-7789 (ダイヤルイン)
ファックス：06-6879-7774
電子メール：reiden@pwr.eng.osaka-u.ac.jp